



Title	アラビア語の形態法的選好と記号論的不透明性
Author(s)	仲尾, 周一郎
Citation	アラブ・イスラム研究. 2023, 21, p. 39-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106202
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラビア語の形態法的選好と記号論的不透明性

仲尾 周一郎*

Morphological preference and semiotic opacity in Arabic

Arabic, with its sister languages of the Afroasiatic family (especially Semitic), has been famously characterized to have a unique nonconcatenative morphology, in which, the traditional explanation says, words are formed from ‘consonantal roots’ and ‘vowel patterns’. This view has been critically contested by different modern structuralist and generativist frameworks. This trend, on the one hand, successfully located the morphological system of Arabic (Semitic languages in general) on the cross-linguistic map, but on the other hand, their reductionistic analyses have neglected the actual cross-linguistic rarity of this system.

This study attempts at re-presenting the unique natures of Arabic morphology by adopting a relatively theory-neutral concept of ‘transfix,’ which has been increasingly accepted by typologists, and points out that the preference of transfix have triggered the preference of truncation and metanalysis and avoidance of linear morphological processes. On this ground, this study argues that the semiotic opacity—a functional ‘inefficiency’—caused by these features has mystified Arabic/Semitic ‘transfixing’ morphology and made it a typological anomaly.

1. はじめに

2016年公開の映画『メッセージ』（原題：Arrival）では、主人公が異星人の非線形文字言語を参与的に学ぶ中で、世界の見え方が「非線形的」に変わってしまう（未来が見えるようになる）というストーリーが描かれている。部分的には、ある種の言語相対論的な仮説（「言語が文化／思考を規定する」）をかなり大胆に解釈した言語学的サイエンス・フィクションである。

ところでアフロアジア語族、なかんずくセム語派の諸言語は、「語根・パタン」形態法（‘root-and-pattern’ morphology）と呼ばれる非線形的、もとい不連続的な形態法（non-concatenative morphology）をもつ言語として、つとに有名である。アラビア語の「語根・パタン」システムは同系諸言語の中でも際立って生産性・透明性が高く、中世以来のアラビア語の学問的議論・教育的伝統の根幹をなしてきた。残念ながら、アラビア語を学んで未来が見えるようになるわけではないが、この形態法はそれと出会う者にとって言語観を大きく変えるような現象であり、現に広く言語学諸分野に対して経験的・理論的示唆を与えてきた。

* 大阪大学大学院人文学研究科 准教授

同時にこうした「特殊な言語」としてのアラビア語（および同系諸言語）の性格付けは、1980年代以後のアメリカ言語学界を中心に、人類言語の普遍性を前提とする理論的立場から批判的に検討され、世界的に多くの議論を引き起こしてきた。一方で、こうした潮流は普遍的な枠組みに則ることで個別言語的な「語根・パタン」概念を棄却するという方向性をもっており、アラビア語や同系諸言語の形態法（以下、便宜的に「アラビア語型形態法」と呼ぶ）をやや一面的に定義づけ、その实际的に「特殊」な側面を捨棄してきたのも事実である。

本稿の目的は、通言語的に特殊といえそうなアラビア語形態法に関わる言語事実の記述的整理を行うことである¹⁾。ただし、本稿はアラビア語やセム諸語に詳らかでない言語学者に向けた議論を企図しており、ここで提示する言語事実の多くはアラビア語研究において広く指摘ないし認識されてきたものであることを予告しておく。

第2節では、まず代表的なアラビア語形態論の分析視座として、(a)「語根・パタン」モデル、(b)韻律形態論、(c)「語幹基盤」アプローチ、および現在行われている議論の方向性の課題を概観する²⁾。第3節では、アラビア語形態法に関する経験的言語事実を、「貫通接辞」という概念を軸に、形態法的選好（短縮の選好、接辞や複合の忌避、異分析の生産性など）に着目しつつ記述的に提示する。第4節では本稿の議論をまとめたうえで、歴史言語学的・言語類型論的展望を述べる。

2. アラビア語形態論の代表的な分析視座とその限界

2.1. 「語根・パタン」(‘root-and-pattern’) モデル

西洋や日本における、外国語としてのアラビア語教育・研究においては、アラビア語形態論は、大まかには (1) のようなことばで説明されることが一般的である。

- (1) 基本的に3つ（または4つ）の子音からなる「語根」（√で示す）を母音からなる「パタン」に挿入（+接辞付加・音韻交替）することで語が形成される。例えば、「書」のような抽象的な意味をもつ語根 √ktb からは以下のような語が形成されるが、母音パタンは主に文法的な機能を担っている³⁾。

-
- 1) 本稿では、議論の簡素化のため対象言語はアラビア語（断りが無い限り現代文語アラビア語）に限定するが、その他の同系の諸言語においても並行的な検討が可能であり、期待される。
- 2) 学説史については Ratcliffe (1997, 2013)、Rubba (2001)、Prunet (2006)、高橋 (2006)、言語現象の包括的な整理としては McCarthy (1979)、Ratcliffe (1998) も併せて参照されたい。
- 3) 本稿では国際音声記号により音声実現に近似する音素表記を採用。ただし、いわゆる強勢音（口蓋垂音）には視認性の向上ため下点を用い（e.g., s [s*]）、規範音に揺れがある音素については <ح> /ħ/, <خ> /χ/, <ع> /ʕ/ の表記を採用。また、任意の子音に C、任意の母音に V と表記する。語釈には M. 男性、F. 女性、SG. 単数、PL. 複数、GER. 動名詞、PFV. 完了、IPFV. 未完了を用いる。* は非文法的形式ないし祖語の再建形式、/.../ は音韻論の基底、→ は音韻交替の方向、> は歴史変化、>> は語形成の方向を表す。特段必要ない場合は、名詞格語尾および動詞語尾は省略する（語末の - にて標示する）。動詞は3人称単数男性形（特に必要なければ未完了形）を挙げ、屈折語尾は省略する。アラビア語を含む世界の主要な言語に関する例示は引用を省略する。

a. 無標動詞（「第 I 型」）の屈折（3SG.M）

PFV. **katab-** / IPFV. **ja-ktub-** 「書く」（能動態）>> PFV. **kutib-** / IPFV. **ju-ktab-** 「書かれる」（受動態）

b. 派生名詞類（第 I 型動詞非定形屈折含む）

katb-, **kitbat-**, **kita:bat-** 「書くこと (GER.)」（第 I 型動名詞）**ka:tib-** / **kutta:b-**, **katabat-**, **ka:tib-ūna**

「書いている、書き手、作家、書記.M.SG/PL」（第 I 型能動分詞、行為者名詞）

maktu:b- / **maka:ti:b-**

「書かれてある、書き物、手紙(.M).SG/PL」（第 I 型受動分詞、被動名詞）

kati:bat- / **kata:ʔib-** 「戦隊(.F).SG/PL」（名詞）**kutta:b-** / **kata:ti:b-** 「コーラン学校(.M).SG/PL」（名詞）**kita:b-** / **kutub-** 「本(.M).SG/PL」（名詞）>> **kutajjib-** / **kutajjiba:t-** 「小冊子(.M).SG/PL」（縮小名詞）**maktab-** / **maka:tib-** 「机、事務所(.M).SG/PL」（場所名詞）**maktabat-** / **maktab-a:t-**, **maka:tib-** 「書店(.F).SG/PL」（場所名詞）

c. 派生動詞（動名詞形を含む、定動詞は 3SG.M 形）

PFV. **kattab-** / IPFV. **ju-kattib-** 「書かせる、戦隊に配備する」

（第 II 型：作為動詞・使役態）

>> PFV. **kuttib-** / IPFV. **ju-kattab-** 「書かせられる、戦隊に配備される」

（同受動態）

>> GER. **takti:b-** 「書かせること」（同動名詞）PFV. **ʔaktab-** / IPFV. **ju-ktib-** 「書かせる」（第 IV 型：使役態）>> PFV. **ʔuktib-** / IPFV. **ju-ktab-** 「書かせられる」（同受動態）>> GER. **ʔikta:b-** 「書かせること」（同動名詞）PFV. **ka:tab-** / IPFV. **ju-ka:tib-** 「(～に) 手紙を書く」

（第 III 型：(二者間行為的) 適用態）

>> PFV. **ku:tib-** / IPFV. **ju-ka:tab-** 「手紙を書かれる」（同受動態）>> GER. **muka:tabat-** 「(～に) 手紙を書くこと」（同動名詞）PFV. **taka:tab-** / IPFV. **ja-taka:tab-** 「文通する」（第 VI 型：相互態）>> GER. **taka:tub-** 「文通」（同動名詞）PFV. **(ʔi)ktatab-** / IPFV. **ja-ktatib-** 「書写する、署名する、講読する」

（第 VIII 型：再帰（自己受益）態）

>> GER. **(ʔi)ktita:b-** 「書写、署名、講読」（同動名詞）PFV. **(ʔi)staktab-** / IPFV. **ja-staktib-** 「口述筆記する、書くよう頼む」

（第 X 型：使役・再帰（自己受益）態）

>> GER. **(ʔi)stikta:b-** 「口述筆記、書くよう頼むこと」（同動名詞）

ここでいう「語根」とは、一般的な伝統文法のアラビア語術語で *ʔaṣl* や *jaḏr* とよばれる概念の直訳である。同様に「パタン」は *bina:ʔ* や *wazn* とよばれる概念の直訳である（伝統的には動词语根 *ʔfʕl* 「する」を用いて、例えば *CiCa:C-un* は *fiʕa:l-un* のように示される）。この概念は8世紀の学者アル＝ハリリーにはじまる辞書学的伝統に由来し、ヘブライ文法学および西洋の文法学を経て19世紀に近代言語学に受容されたようであり、元を辿れば現在言語学で一般に用いられる「語根」(‘root’) 概念自体の起源でもある (Koerner 1989: 87, 高橋 2005, Aronoff 2013)。

しかし、これら二つの「語根」概念を単純に同一視することはできない⁴⁾。特にアメリカ構造言語学以後の言語学では、「語根」はふつう「語彙的な意味をもつ最小の形態素」のように定義づけられる点で「接辞」の対概念であり、かつ語幹 (stem; 屈折接辞のホスト) とは異なるレベルの概念として峻別される (語根・語幹を合わせて「語基 base」とも呼ぶ)。アラブ伝統文法は語幹・接辞の概念をもたなかったが⁵⁾、実際にアラビア語では生産的な接頭辞・接尾辞とよびうるものはごくわずかであり、かついずれも多かれ少なかれホスト側のパタンと相関をもつ傾向がある (3.2 節)。また、アラビア語では再分析により二次的 (場合によっては循環的) に、「語彙的な意味をもつ最小の形態素」をさらに分節することで、生産的に「語根」が形成され (2.3 節、3 節)、一般言語学的な「語根」概念とは定義がずれている。

ところで、現代の言語学者にとって、伝統的なモデルによる説明には大きく2つ満足しにくい点がある。第一に、理論化を目的としていないため基本原理による単純な説明にとどまり、一般化としては過少になりがちである。伝統的に異なる「パタン」とされているもののいくつかは、さらに少数の要素に還元されうることも少なくない (次節参照) ⁶⁾。第二に、こうした「子音語根・母音パタン」によって説明される言語システムは通言語的には極めて稀である。人間言語の「普遍性」を前提とする言語理論にとっては、こうした個別的説明は望まれない。こうした動機から、1980年代以後のアメリカの (アラビア語) 言語学界を中心に、大きく2つの段階 (2.2 および 2.3 節に示す) を経て、「語根・パタン」パラダイムの相対化が試みられてきた。

2.2. 韻律形態論

生成文法の立役者であるノーム・チョムスキーの処女作 (修士論文、Chomsky 1951=1979) がヘブライ語形態音韻論に関するものであったことは広く知られている。分析としてはごく萌芽的なものであったが、その独創性の一端はヘブライ語の母

4) 実際には、多くの言語学者はこの問題についてさほど自覚でなく、例えば Dixon (2010: 141–142) はアラビア語／セム語の「語根」は言語事実であるかのように紹介している。

5) 伝統文法では、文字言語と音声言語のレベルは峻別されず、表記上それ自体が子音文字で表記される接辞やパタンの一部 (長母音など) は一般的に「付加文字」(*harf zaʔid*) と呼ばれる。

6) むしろ、伝統文法では「子音語根」側について過剰に一般化を試みる傾向があった。例えば、子音語根を構成する子音の数は3か4とされ、2子音ないし5子音 (以上) からなる「子音語根」は、アドホックにみえる方法で3ないし4子音に還元された (Haywood 1965)。また、逆に3子音以上からなる複数の子音語根を、2子音からなる語源的基底により説明することを試みる二子音語根仮説 (‘biradical theory’, Zaborski 2006 参照) も現在に至るまで議論を呼んでいる。

音パターンをスキーマ化（母音ないし $\emptyset$ が挿入される、2つのスロットからなる斉一的な「母音パターン」の設定）した点にあった（McCarthy 1981）。

その後、パターンに関する分析は、現代の音韻論に多大な影響を与えたことで知られる John J. McCarthy によって推進された。McCarthy (1979, 1981) は、自律分節音韻論（Autosegmental Phonology）の方法を援用し、伝統的なモデルでいう「母音パターン」を音節構造のテンプレートと母音メロディという異なる二つの層に分ける、後に「テンプレート形態論」（templatic morphology）とよばれる説明方法を提示した。

これにより、例えば (1) の動詞完了形語幹 *katab-*, *kattab-*, *ka:tab-*, *kutib-*, *kuttib-*, *ku:tib-* から、6 種のかばん形態素的な「母音パターン」（CaCaC-, CaCCaC-, Ca:CaC-, CuCiC-, CuCCiC-, Cu:CiC-）ではなく、2 種の「母音メロディ」（能動態 a_a, 受動態 u_i）と 3 種の「韻律テンプレート」（無標形 CVCVC-, 使役態 CVCCVC-, 適用態 CV:CVC）が適切に抽出される（ただし接辞は別扱い）。例えば *kutib-*「書かれた」はそれぞれの分析枠組みを使えば (2) のように図示できる。

(2) a. 「語根・パターン」モデル

k t b (子音語根)
| | |
C u C i C (a) (母音パターン)

b. 「テンプレート形態論」モデル

k t b (子音メロディ)
| | |
C V C V C (韻律テンプレート)
| |
u i (母音メロディ)

この分析枠組みは、単に「語根・パターン」型形態論の分析を進めただけでなく、これまで世界に類を見ない個別的な現象としか見られてこなかったアラビア語型形態法を、世界の諸言語に見られる韻律テンプレートが関わるあらゆる形態法と並行的に議論することを可能にした。例えば、日本語の 2 拍（CVV, CVC, CVCV）＋敬称からなるあだ名の形成（みどり → みーちゃん、みっちゃん、みどちゃん）、4 拍からなる省略語の形成（ちょーべりーばっど → ちょべりば）や幼児語に見られる CVCCV・CVVVCV 型の韻律構造（ねんね、ばーば）などの現象との共通性の指摘は今も新鮮な驚きを喚起するだろう（McCarthy & Prince 1986, 1990, 川原 2022）。

この上で、McCarthy & Prince (1986) は、「テンプレート形態論」だけでなく、部分重複が行わる単位や接中辞の挿入位置の計算など、音声言語にみられる音韻と形態のインタラクションを分析する理論としての「韻律形態論（Prosodic Morphology）」を提唱した。この理論では、例えば (3) クペニョ語（ユト・アステカ語族）における適合形（habilitative）派生（McCarthy & Prince 1986, 1990）のような現象は、アラビア語と同様に典型的な「テンプレート形態論」の例と位置付けられた（例の表記は変更していない）。

(3) 語幹 適合形

čál	>>	čáʔaʔal	「殻をむく」
čaḡṇəw	>>	čaḡṇəʔəw	「怒る」
xáləyəw	>>	xáləyəw	「落ちる」(表層的には同形か)

さて、同じく伝統的な「語根・パタン」モデルでは分析が過少に見える例としては、(4) の名詞複数形語幹のも挙げられる。(4a) は (1) の一部の例の再掲、(4b) は種々の分節音・韻律構造をもつ単数形に対する複数形の例である。

(4) a. SG. kati:b-at-	PL. kata:ʔib-	「戦隊」
SG. kutta:b-	PL. kata:ti:b-	「コーラン学校」
SG. ma-ktab-	PL. maka:tib-	「机・事務所」
SG. ma-ktu:b-	PL. maka:ti:b-	「手紙」
b. SG. jad-	PL. ʔaja:dij-	「手」
SG. lajl-	PL. laja:lij-	「夜」
SG. dulfī:n-	PL. dala:fī:n-	「イルカ」
SG. ʕankabu:t-	PL. ʕana:kib-	「蜘蛛」
SG. raʔs-ma:l-	PL. rasa:mi:l-	「資本」(raʔs-「頭」+ma:l-「財産」)

伝統的なモデルでは (4a) は「子音語根」が代入される複数形「母音パタン」の形式としては、それぞれ CaCa:ʔiC-, CaCa:ʕi(:)C-, maCa:ʕiC-, maCa:ʕi:C- と分析されるが (cf. Wright 1859=1967, part I: 228–229)、明らかに CaCa:ʕi(:)C- のようにスキーマ化できる。子音スロットに代入される子音は語根子音自体というよりは単数形に実現している分節音と対応しており (過不足の場合は補充・削除される)、末尾の母音の長短も基本的に単数形の語幹末音節の長短と一致している。つまり、この語形成での入力形式となっているのは「子音語根」ではなく単数形語幹それ自体だと考えざるを得ない。こうした2つの語幹間の非「子音語根」的な音韻特徴 (特に分節音) の共有は「転移」(transfer) と呼ばれる (Bat-El 1994, Davis 2019) 7)。

McCarthy & Prince (1990) は「転移」現象が「語根・パタン」モデルでは分析できないことを明確に指摘した上で、韻律テンプレートによる語形成というプロセスを重視する韻律形態論は、伝統文法では説明されてこなかった事例を含め、アラビア語の多くの現象を統一的に説明できることを示している 8)。

7) このタイプの複数形に加え、指小形形成 (入力形式によって CuCaj(Ci(:))C の形をとる。e.g., (1) の kita:b-「本」>> kutajjib-「小冊子」) もこうした議論の中でよく扱われてきたが (e.g., McCarthy & Prince 1990, Ratcliffe 1998)、本稿では例示を割愛する。一般には指摘されないようだが、単数形・複数形で母音の「転移」がみられる例も存在する (3.5.1 節参照)。

8) 例えば、アラビア語古典詩に現れる特定の韻律的なテンプレート (CVCCV, CVVCV) をもつ型の呼格 (e.g., ma:lik-un マーリク (人名) → ma:li, ʕuθma:n-u ウスマーン (人名) → ʕuθma) は「語根・パタン」モデルでは説明しにくい、韻律形態論であれば十分説明できる。

韻律形態論におけるアラビア語形態論分析は、このように伝統的な「語根・パタン」モデルを先鋭化し、それに代わるものとして「子音メロディ」、「母音メロディ」、そして目玉としての「韻律テンプレート」概念を提示したが、一方で「子音語根」という概念自体の有用性自体は問うていない⁹⁾。この結果、この分析には大きく2つの理論的な課題が残されることとなった。

まず、実際には(受動態交替を含む)派生動詞形態論の一部を除けば、「韻律テンプレート」と「母音メロディ」を分節すべき例はほぼ存在せず(cf. Broselow 2000; 例えば CaCa: CiC- を CVCV: CVC と(a_)a_i に分けるのは過剰分析になる)、「韻律テンプレート」が形態素としてのステータスをもつと考えるべき根拠が不十分である点である(Ratcliffe 1998, 高橋 2006)。

次に、「子音メロディ」と「母音メロディ」を分節する根拠は伝統文法に依拠するに留まり改めて新たに論じてはおらず、従来の「子音語根」と、語幹から新たに抽出されたと考えるべき「子音メロディ」(CaCa: Ci(:)C- 型複数形に挿入される「子音メロディ」など、定義上「語根」と呼べないもの)の二種が、両者の関係が十分論じられないまま存在することになっている点である。つまり、広義の「子音メロディ」はいわばブラックボックス的なモジュールとして位置づけられているにすぎず、少なくとも個別言語の分析道具としては大きな課題になっている¹⁰⁾。

これらの問題は、CaCa: Ci(:)C- 型複数形など、ある「語幹」から別の「語幹」が形成されたと考えるべき事例の分析を敷衍することで、「そもそも複数の発音不可能な形態素を基盤とした語形成を想定する必要があるのか」という問いに還元できる。そして、1990年代以後のアラビア語(・ヘブライ語)研究ではこの問いが直接的に論じられることになった。以下ではまずこの問いの歴史を遡って検討したい。

2.3. 「語幹基盤」モデル

現在主流の伝統文法とは異なり、中世のアラブ文法学では「語根・パタン」のような不連続形態素を必ずしも説明原理とはしていなかったことが知られる。伝統文法の術語では動名詞は *maṣdar* と呼ばれるが、その字義的な意味(「源」)のとおり、定形動詞は「語根」ではなく動名詞をもとに形成されるものとして説明されることがあった(Larcher 2006, Aronoff 2013)。また、西洋古典文法の影響を受けた、または言語学の枠組みにおけるアラビア語／セム語研究では、「語幹」・「接辞」の「交替」という概念による説明が意識的・無意識的に行われてきた(cf. Bat-El 2017)¹¹⁾。「語幹交

9) 'Although Arabic templatic morphology is chiefly root-based, stem-based templatic formations [...] are also known' (McCarthy & Prince 1990: 218)。

10) 韻律形態論によるアラビア語形態論分析は一般言語学的文脈で広く紹介される(e.g., 川原2022)のに対し、アラビア語研究でさほど支持されないのは、おそらくこの点が原因であろう。

11) 言語類型論的な文脈でも、アラビア語形態論を語幹や接辞の交替という概念だけに基いてより単純なものとして説明するのがごく一般的である。例えば、シュレーゲルやフンボルトに代表される古典的言語類型論では、セム諸語は印欧諸語と同じく典型的な「屈折語」とされるが、このカテゴリーは「語幹」と(かばん形態素的な)「接辞」(の交替)により定義される。

替」的な分析の古典的な事例としては、定動詞語幹交替の分析が代表的なものとして知られる (Prunet 2006, Ratcliffe 2013)。

伝統的なアラビア語辞書学では、(表記上) 安定的かつ顕在的に語根子音が現れやすい CaCVC(-a) 型動詞 (アラビア語学術語で「第 I 型」) の完了形を見出しとし、それに続けて未完了形や動名詞形、およびより長い語幹をもつなどを挙げるという形式が採られる。例えば (5) では、完了形に続く文字 ‘u’ により未完了形語幹が (ja-)ktub- となることが示されている (続く括弧は動名詞形の自由変異)。II、III はアラビア語学でいう「第 II 型動詞」(CaCCVC- 型 : PFV. katab-, IPFV. (ju-)kattib-)、「第 III 型動詞」(Ca:CVC- 型 : PFV. ka:tab-, IPFV. (ju-)ka:tib-) の語幹とその意味を表す (s.o., s.th. 等は非主語項の現れに関する記述)。この記述形式が示すとおり、伝統的には完了形から未完了形が形成されると説明される (Ratcliffe 2013)。

- (5) كتب *kataba u* (katb, كتبة *kitba*, كتابة *kitāba*) to write, pen, write down, ... (هـ s.th.)... II make (هـ s.o.) write (هـ s.th.), ... III to keep up a correspondence, exchange letters (هـ with s.o.) ... (Wehr 1994: 951)

これに対し、語幹基盤モデルを支持する研究からは、むしろ未完了形 (第 I 型動詞) を入力としたほうが分析としては優れていることが、数々の事例から示されてきた (cf. Schramm 1991, Heath 2003, Prunet 2006, Ratcliffe 1997, 2013)。

本稿では詳細には紹介しないが、記述的には以下の 2 点が特に重要だと考えられる。第一に、第 I 型動詞完了形語幹 CaCVC-・未完了形語幹 -CCVC- それぞれの V スロットに現れる母音は動詞ごとに異なり、未完了形から完了形が予想できるが、逆は不可能である (メジャーな交替パターンは PFV. katab-, IPFV. ja-ktub- 「書く」、PFV. jalas-, IPFV. ja-jlis- 「座る」、PFV. marid-, IPFV. ja-mrad- 「病気になる」の三種)¹²⁾。第二に、「弱動詞」(語幹に 2 種の子音 (ないしわたり音) しか表われない動詞) と呼ばれるタイプの動詞 (派生形含む) も、その未完了形の表れは多様な表れをもつものに対し、完了形は比較的斉一的な表れをもち、少なくとも完了形を入力とすべき根拠はない。

語幹基盤モデルに立つ研究は、この上で「弱動詞」について革新的な形態音韻分析を提示してきた。伝統文法では PFV. qa:m-, IPFV. ja-qu:m- 「立つ」のような動詞に /qawam-/、/ja-qwum-/ のような基底形を立て、awa → a:, Cwu → Cu: のような音韻規則により表層形を導くという分析が行われるが、この説明はいくつかのアドホックな音韻規則を含む (cf. 仲尾 2019)。従って、表層に基づき katab-, ja-ktub- と並行的な母音交替 (Ablaut, apophony) と考えれば十分かつより単純である¹³⁾。この上で PFV.

12) この他 fatah- vs. -ftah- 「開ける」、kabur- vs. -kbur- 「大きい、大きくなる」のようなタイプもよくみられるが、前者は音韻論的条件から、後者は意味的条件から表れが説明される (ただし、その他の例外的対応や複数のパターンの変異を許容する動詞も存在する)。第 I 型以外のいわゆる「派生動詞」はパラダイムの完全に予測できる。なお、未完了形語幹と場所・時間名詞語幹に現れる母音 (e.g., ma-ktab 「机」、ma-jlis 「委員会」) の相関も指摘されるが、例外も多い。

13) なお、共時的交替だけでなく、Kuryłowicz (1973), Lipiński (1997), Kogan (2005) など、比較言語

qawwam-, IPFV. ju-qawwim-「立てる」(第 II 型、使役態)、PFV. qa:wam-, IPFV. ju-qa:wim-「立ち向かう」(第 III 型、適用態)などの派生動詞語幹でのわたり音(w)の表れは、第 I 型未完了語幹 ja-qu:m- (の母音部分)から「抽出」(extract)されたものと分析できる (Schramm 1991, Heath 2003) ¹⁴⁾。アラビア語やヘブライ語を含むセム諸語では、借用語などの子音が「抽出」され、あたかも「語根」のようにふるまうという再分析が広くみられるが(「二次語根」; Bat-El 1994, 佐々木 1994, 高橋 2006, 3.3.1 節参照)、これらは並行的な現象とみなすことができる。

このような、伝統モデルでいう「語根」ではなく、子音・母音・韻律構造が一体となった「語幹」ないし「語」を起点として全ての語形成を説明するモデルは「語幹基盤」(stem-based)ないし「語基盤」(word-based)モデルと呼ばれる。特に 1990 年代以後のアメリカにおける理論言語学的セム語研究で広く議論され、「言語学」的な分析姿勢への支持を背景に、一定の評価を得てきた¹⁵⁾。

ところで、「語幹基盤」モデルには大きく分けて穏健な分析と急進的な分析の 2 種が見られる (cf. Broselow 2000, Bat-El 1994, 2017)。急進的な分析として、例えば Ratcliffe (1997, 1998, 2013) は「パタン」という概念さえ棄却し、(6) のように語幹に母音を伴う「空白モーラ」(μ) を挿入した上で、接辞の削除・付加や、音挿入・削除を伴う音節化を行う、という語幹変形 (stem modification) で語形成を説明する (Ratcliffe 2013 を元に表記は筆者修正。この分析では語幹ではなく接頭辞を含む語が入力とされており、<> は空白モーラ挿入位置の計算に関わる音節単位を示す)。

しかし、下に示す (6) のような表現は形態音韻論交替の説明としての齟齬はないが、意味と形式の対応を極端に複雑なものにしてしまっており、「オッカムの剃刀」の原理に照らせば最節的な説明とはいえないだろう。

(6) 入力	αμ 挿入	接辞削除／付加	音挿入
<jak>tub	>> <jVkaμ>tVb	>> kaμtVb	>> ka:tib
「書く.3SG.M」			「書き手.M.SG」
<zur>q	>> <zuraμ>q	>> ja<zVraμ>q	>> jazraqq
「青」			「青くなる」

また、本稿では詳細に立ち入らないが、例えば、「グリーンパークの非対称性」として知られる「子音語根」内の子音の分布に関する制約や¹⁶⁾、音位転換型のことば遊

学的概念としてのセム祖語の「語根」に同様の再建を行う研究もプレゼンスをもっている。

14) アラビア語にはその他にも分節音の性質により様々な語根タイプがあるが(「弱語根」のほかにも第 2・第 3 子音が同じ「重子音」語根など)、並行的な分析が行われる (Ratcliffe 2013)。

15) 理論的背景として、1950 年代のアメリカ構造言語学では不連続形態法の分析に有用な「語・パラダイム」モデル (Word-and-Paradigm model、形態素を基盤とせず、語とそのパラダイム的な変形を用いて語の実現を説明する形態理論) が提唱されていた。このモデルを生成文法の枠組みで発展的に継承した Aronoff (1976) や Anderson (1992) の形態理論が Bat-El (1994) や Ratcliffe (1997) などのセム語形態論研究に影響を与えた。

16) 「子音語根」を構成する 3 子音のうち、第 1・第 2 子音が同じではありえないという制約 (Bat-El

び、言い間違いなどに関する（心理言語学的）音韻論研究は、「子音語根」ないしそれに似た単位を心理的実体として認めるべき証拠を提示してきた（Prunet 2006, Ratcliffe 2013）。このように、急進的な「語幹基盤」モデルには反証も存在していることは無視できない。

穏健な「語幹基盤」モデル分析は、「語根」概念を棄却した上で、語幹を基盤としつつそこからテンプレートに挿入される子音群が抽出される、とする説明である（高橋 2006; cf. Heath 1987, Bat-El 1994, 2017）。結果的には「子音語根」と似た単位ではあるが、この子音群は二次的に形成された「語基」と考えることができ、先述の心理言語学的事実とも齟齬を来さない（高橋 2006）。このモデルを採用する代表的な研究である高橋（2006）は、子音群と母音群それぞれの形態素を入力としつつ、子音群の抽出の後に最適な韻律構造に従う母音要素の接中辞的挿入（および音節形成）によって語形成を説明するモデルを提示している。この伝統的なモデルでいう「語根」と「語（幹）」の位置づけがほぼ逆転している以外は「語根・パタン」モデルの便利な側面を継承しており¹⁷⁾、「形態素」を認めていることで語形成のプロセスの表現としては急進的な「語幹基盤」モデルと比べて単純であり、「転移」現象の存在とも矛盾を来していない点で現実的である。ただし、通言語的に定義されるわけではない「抽出」という形態的プロセス自体については、高橋（2006）は声調交替などと並行的な現象とするにとどまり、現時点で議論が尽くされていると評価することはできない。

2.4. 韻律形態論・「語幹基盤」モデルの限界

俯瞰的にみれば、韻律形態論も「語幹基盤」モデルも、個別言語学的な概念を避けてアラビア語形態論を説明することを一つの目標としたものであり、議論の過程で多くの論点を示してきた。しかし、これらの議論には限界もある。いずれも、アラビア語型形態論が通言語的に「例外的」にみえるのは「語根・パタン」モデルのバイアスのためである、という仮定を議論の出発点にした上で（ある種の論点先取）、還元主義的（「～にすぎない」）な議論の方向性が見られる点、そして、大きくは生成文法（生成音韻論）の枠組みに則っているため、その不得手とする意味的側面については無関心であり続けてきた点である。

韻律形態論は (3) に示したクペニヨ語のような例を「テンプレート形態論」に位置づけているが、アラビア語型形態論との差異は無視できない。クペニヨ語では、①入力形式はあくまで連続的な形態素であり、②入力形式は出力形式からほぼ復元可能であり、③出力形式は明らかに有標である。アラビア語型形態法は、入力を「子音語根」とするのであれば①、入力を「語幹」とするなら②と③についてクペニヨ語とは

2003, Ratcliffe 2013 参照)。必異原理（Obligatory Counter Principle）の表れとして説明できるが、そのため隣接した分節音の集合としての「子音語根」が前提となる。

17) Bat-El (2017) は、‘root-based item-and-arrangement model’（＝「語根・パタン」モデル）に対してこのようなモデルを ‘word-based item-and-arrangement model’ と呼んでいる。なお、Item-and-Arrangement モデルはアメリカ構造主義言語学における形態論モデルの一つであり、古典的な、形態素の結合による語形成の説明モデルを指す。

真逆である。両者は（仮説的な）「韻律テンプレート」という概念で分析可能である点でのみ共通しているに留まり、あくまで「アラビア語型形態論は例外的なシステムではない」という証拠とできるわけではない。

「子音語根」・「母音パタン」という概念が含意するとおり、アラビア語型形態法は、韻律的特徴だけではなく分節音の性質（子音か母音か）が分節に関わり、かつ分節される単位（形態素ないし形態）が不連続であるという点を無視して論じることはいできない¹⁸⁾。接頭辞・接尾辞によらない語幹の変形¹⁹⁾、特に古典的な印欧諸語などにおける「母音交替」（Ablaut, apophony）との類似は様々な論者によって指摘されてきているが（cf. Kuryłowicz 1973）、「語幹基盤」モデルで第 I 型動詞未完了形語幹を入力とする分析が支持されるのも、恐らくこの語幹が母音を 1 つしか持たず、「母音交替」と同一視しやすいためであり、(9) のように複雑な階層的語幹変形を想定するのも、「不連続な、複数の母音からなる形態素」を認めないためであろう。

しかし、CaCa:Ci(:)C- 型複数形や (1) kita:b- 「本」 >> kutajjib- 「小冊子」のような CuCaj(Ci)C- 型指小形形成のように複数の母音メロディ（多くの場合 2 つ、最大 3 つ）が指定される語幹の交替では、複数（回）の母音の交替を認めざるを得ず、さらに韻律構造テンプレートと母音メロディを分節すべき根拠は、韻律形態論の理論的要請以外には存在しない。また、印欧諸語などに典型的な単一の母音の交替は、特定の文法機能と明確に対応するものとはいえず、種類もごくわずかであることが一般的である。対してアラビア語型形態論では、それ自体が何らかの意味ないし機能をもつ（形態素として認められうる）、多くの種類の「母音パタン」が存在している。こうしたふるまいが可能なのは、「母音パタン」が複数の母音と韻律構造の組み合わせによる、比較的複雑な構造をもちうることであり、表裏一体であろう。つまり、「母音交替」と「母音パタン」の差異は単なる程度差ではなく明らかに質的なものであり、要素還元主義的なアプローチはアラビア語型形態論を「通言語的に一般的なパタン」に位置づけたことにはならない²⁰⁾。

言語類型論的文脈では、「母音パタン」を不連続な接辞の一種と捉え、「貫通接辞」（transfix）という術語で紹介されることも一般的になりつつある。この術語で捕捉さ

18) Broselow (2000) はシエラ・ミウォク語（ペヌーティ語族）の動詞派生もアラビア語型形態法と並行的現象として挙げている（基本語幹 *kelti*, *polaat* から第 2 型 *kelit*, *polat*, 第 5 型 *kellit*, *pollat*, 第 6 型 *kelti*, *polta* のように一律の韻律構造に従って語幹が作られる；語義不明）。この事例も韻律形態論的にはアラビア語と並列されうる例ではあるが、韻律構造のみに関わる語形成である。

19) 韻律交替や母音交替のほか、声調交替／声調形態素（suprafix）、重複（reduplication）、減算（subtraction）など、接頭辞・接尾辞以外の語形成手段をまとめて「語幹変化」（stem modification, introflexion）と呼ぶこともある（Rubba 2001）。例えば高橋（2006）は声調形態素の付加とそれに伴う入力語幹の声調情報の削除を「抽出」と比べている。

20) 典型的な要素還元主義的説明として、Bat-El (2017) はセム諸語の形態法は韻律構造の要請・母音交替・非隣接分節音間の共起制限（前述の「グリーンバーグの非対称性」のこと）の 3 点だけで定義づけ可能であり、これら個々の現象は通言語的にみられるものだが、セム諸語はその全てを同時かつ顕著にもっているがゆえに「特殊」であるにすぎない、と主張している。この上で、Bat-El (2017) はアラビア語型形態論の母音交替を印欧語などと同様のものと見積もっていることには、以下で論じる通り大きな問題がある。

れる事例としては、(7) グタ語（オーストロアジア語族）の「エコー形式」²¹⁾の形成も参照されるが（McCarthy 1982, Bat-El 2003）、こうした例では韻律構造は交替せず、あくまで周縁的な文法現象に過ぎない点も指摘されている（Broselow 2000）。

- | | | | | |
|-----|-------------|-------------|-----------|-------------|
| (7) | a. kiton | 「神」 | b. kesu | 「防寒衣」 |
| | kiton-kitin | 「神より弱い霊的存在」 | kesu-kisi | 「布切れ」 |
| | kiton-kutan | 「神以外の霊的存在」 | kesu-kusa | 「その他の防寒用素材」 |

結論的には、複数の母音と韻律構造が交替するタイプの「貫通接辞」は、アフロアジア語族を除いては知られておらず（cf. Broselow 2000）、アラビア語型形態論の「例外性」は単に理論的問題ということとはできない。この上で、韻律形態論・「語彙基盤」モデルに立脚した主要な研究の大部分が形態音韻論的交替のみを扱うにとどまり、アラビア語型形態論における意味を考慮してこなかった点は大きな問い残しである。筆者が知る限り、そうした問いを含む研究は自然形態論（Natural Morphology）に基づく議論を行っている Kilani-Schoch & Dressler (1985) のみである。

自然形態論（Natural Morphology）とは、記号論に立脚する形態理論であり、「図式性」（diagrammaticity；形式的有標性・意味的有標性が一致すること）、「形態法的透明性」（morphotactic transparency；接辞付加が語基を変化させないこと）、「指標性」（indexicality；接辞が語彙的形態素にできるだけ隣接すること）、「サイズの最適性」（語彙的形態素は1～2音節、文法的形態素は1音節）といった、相互に矛盾する概念を形態法の「自然さ」（naturalness）を評価する尺度として用いることで、通言語的な形態法的選好やその多様性を説明するものである。例えば、トルコ語のような「膠着語」は図式性・形態法的透明性が指標性・サイズの最適性に優先されるが、アラビア語では指標性・サイズの最適性が図式性・透明性に優先される（Kilani-Schoch & Dressler 1985）。ただし、自然形態論も言語学的相対主義を前提としているため、トルコ語とアラビア語のいずれがより「自然」か、という議論は行われない。

惜しむらくは、Kilani-Schoch & Dressler (1985) はある種の語幹基盤モデルに立った上で、貫通接辞を印欧諸語の「母音交替」と事実上同一視しており、現象の記述としてもごく表層的なものに留まっている。また、自然形態論では、世界の言語は「1つの形、1つの意味」という記号論的な透明性（transparency）の原理をもつ普遍的傾向を認めており、貫通接辞は形態法的透明性にとって「最悪」（‘the worst,’ Kilani-Schoch & Dressler 1985）とさえ表現しているにも関わらず、相対主義を超える枠組みでこうした形態法存在の説明できていない点は認めざるを得ないだろう。

以上からいえるのは、これまでのアラビア語型形態法研究では、韻律構造の交替を伴う「貫通接辞」（複数の語幹母音の交替、cf. Broselow 2000）の付加という、記号論

21) 南アジア言語地域に広くみられる、重複と分節音の交替によって派生されるようなある種の擬態語的表現。McCarthy (1982) はこの派生が重複を含むことを無視して後半部分の形式のみを挙げているが、本稿ではこの事実を明示するため、データを修正して提示している。

的原則からも外れ、通言語的にも稀有な形態法についてのメタ的な記述を欠いたまま、あくまで「例外的な言語現象ではない」と結論づけることが自己目的化してきた、ということである。目下最優先されるべき課題は、できる限り中立的な枠組みに基づきアラビア語型形態法を記述することである。以下ではこの目的のため、比較的理論中立的といえそうな「貫通接辞」という概念を軸に、特に記号論的透明性（図式性・形態法的透明性）に関わる諸事例に着目する。

3. アラビア語の貫通接辞と形態論的ふるまい

「貫通接辞」という術語は、あたかもそれが接頭辞・接尾辞・接中辞・接周辞などと同様に「接辞」(affix) の一種であるような印象を抱かせるが、その他の接辞とは異なる形態論的ふるまいが含意されることもある。以下では、アラビア語における貫通接辞の選好と表裏一体になっている諸現象を、接辞の多重付加の忌避と短縮、接頭辞・接尾辞の忌避と短縮、貫通接辞のホストの認定の難しさ、派生語をホストとする貫通接辞付加の諸問題の4点から整理する。

3.1. 接辞の多重付加の忌避と短縮

先述の自然形態論でいう「指標性」という尺度からは、一つの語基（語根）に対して複数の接辞が付加されることを忌避する傾向が演繹される。この傾向が誘発すると考えられるのは、ラテン語など古典的な印欧諸語に見られる「かばん形態素」的な屈折接尾辞や、「短縮」(truncation) すなわち付加的な形態論のプロセスに誘発される削除 (Dressler 2000、同音削除 haplology を含む) といった解決策である²²⁾。短縮は (8) のような例を含めれば、散発的には世界の言語にごく一般的にみられるものであるが、入力形式の情報の一部を削除するため、形態法的不透明性を高め、同音異義を誘発することも稀ではない（例えば古典日本語 ak-u 「開く (ak- 四段活用)」 vs. ak-u 「開ける (ake- 下二段活用)」)。短縮により削除される要素は (9) 英語の -at- 削除 (Aronoff 1976) のように形態論的な単位でもありうる。

- (8) 古典日本語 ak-e- 「開ける」 + -u [終止] >> ak-u 「開ける.[終止]」
 ポルトガル語 fala- 「話す」 + -o [1SG] >> fal-o 「話す.1SG」
 グルジア語 k'at'a 「ネコ」 + -is [属格] >> k'at'-is 「ネコの」
 megobar- 「友人」 + -is [属格] >> megobr-is 「友人の」

- (9) nomin-ate >> nomin-ee (*nomin-at-ee)
 negoti-ate >> negoti-able (*negoti-at-able)

22) 本稿では Dressler (2000) に倣い意味変化や付加的操作も含まない「切除」(clipping、略語形成など) を「短縮」から峻別するが、一般に両者を峻別せず 'truncation' と呼ばれることも多い。

先に述べたような「かばん形態素」型屈折接尾辞の交替も「短縮」として分析することもできる。例えば、スワヒリ語ではクラス接頭辞により数の交替を標示するが、これらは単に数を表す形態素とはいえない。(10) の -tu や -ti は（語源的な）語根とは呼ぶうるが、語彙的な意味の一部はクラス接頭辞が担っており、単純に -tu 「人」、-ti 「木」とはできない。

- (10) a. SG. m-tu PL. wa-tu 「人」 (1 / 2 クラス)
 SG. ħi-tu PL. ma-tu 「巨人」 (5 / 6 クラス)
 SG. ki-tu PL. vi-tu 「もの」 (7 / 8 クラス)
 b. SG. m-ti PL. mi-ti 「木」 (3 / 4 クラス)
 SG. ħi-ti PL. ma-ti 「巨木」 (5 / 6 クラス)
 SG. ki-ti PL. vi-ti 「椅子」 (7 / 8 クラス)

改めてアラビア語における (11) のような交替（データは (1) の再掲）を検討するなら、貫通接辞は語彙的な意味の一部と文法的機能（品詞性を含む）を兼ねている。スワヒリ語の例と並行的に、やはり ktb という要素に特定の意味を認めることはできない。こうした例から、一部の語幹基盤モデルで想定される「抽出」というプロセスは通言語的な概念とはいえないが、ある種の「短縮」と言えそうである。

- (11) a. SG. kita:b- PL. kutub- 「本」
 SG. ka:tib- PL. kutta:b-, katab-at- 「書き手」
 b. IPFV. ja-ktub- GER. kita:b-at- 「書く（こと）」
 IPFV. ju-kattib- GER. ta-kti:b- 「書かせる（こと）」

ただしスワヒリ語のクラス接辞間の対応は透明であり、「屈折クラス」(inflectional class) と捉えることができる。例えば (10) のように、単数形が ki- をもつならその複数形は vi- をもつことがほぼ確実（逆も同様）である。一方で、アラビア語の場合、(12) が示すように、「パタン」間の関係はほぼ屈折クラスといえる場合もあれば、単に語彙的に決定されている例も少なくはなく、予測は困難であることは稀でない²³⁾。

- (12) SG. ʔa:lib- PL. ʔulla:b- ʔalab-at- *ʔulaba:ʔ- 「学生」
 ja:ħil- juħħa:l- jaħal-at- juħala:ʔ- 「無知な」
 ʔa:ʕir- *ʔuʕʕa:r- *ʔaʕar-at- ʔuʕara:ʔ- 「詩人」
 raʔi:s- *ruʔʔa:s- *raʔas-at- ruʔasa:ʔ- 「大統領」

23) 具体的には、単数形から複数形、CuCaCa:ʔ- 型複数形から単数形は予測不可能だが、CuCCa:C- および CaCaCat- 型複数形からは男性単数形 Ca:ʕiC- がほぼ確実に予測できる。この他、例えば第 I 型動詞語幹とその動名詞形（形容詞語根の抽象名詞形）は相互に予測不可能だが、その分詞形は予測可能である。派生動詞（特に第 IV～X 型動詞）パラダイムは概ね予測可能である。

さて、接尾辞・接頭辞付加にも短縮が見られることは上で見たとおりであるが、これは接尾辞・接頭辞の性質から直接誘発される現象ではなく、その動機として「指標性」のような概念が別途必要になる。一方で、複数の貫通接辞を階層的に付加することは、1枚の紙に色を塗り重ねるようなものであり、明白に困難である。アラビア語では、派生動詞パラダイム（2.3 節）や「転移」現象など、ごく部分的に貫通接辞の階層的な付加のプロセスが見え隠れすることもあるが、基本的には短縮のプロセスが必要であり、少なくとも具現的な語形どうしを比べる限り、(13) や (14) が示すように階層的な接尾辞付加と比べて派生・屈折の過程が不透明である。

(13) a. 英語	アラビア語	
special	ʕa:ʃʃ-	「特殊・特別な」
special-ize	ju-ʕaʃʃiʃ-	「特殊化・特別化する」
special-iz-ation	taʕʃi:ʃ-	「特殊化・特別化」
b. 日本語	アラビア語	
kak-(u)	ja-ktub-	「書く」
kak-i-te	ka:tib-	「書き手」
kak-i-te-tati	kutta:b-	「書き手たち」

つまり、貫通接辞の選好は構造的に短縮を選好し、その結果として同音異義語の発生を誘発する。実際に、「子音語根」（あるいは入力の子音部分）を共有する別々の語幹から (14) 「第 II 型」動詞（使役や出名動詞 *denominative verb*）が形成される場合、(15) 複数形形成において同音意義語が形成されることは全く稀ではない²⁴⁾。

(14) a. ha:miʃ-	「周縁.SG」	>>	ju-hammif-	「周縁化する」
hawa:miʃ-	「周縁.PL、欄外の註」	>>	ju-hammif-	「欄外に註をつける」
b. buʕa:r-	「蒸気」	>>	ju-baʕʕir-	「蒸発させる」
baʕu:r-	「香（煙）」	>>	ju-baʕʕir-	「香を（たき）つける」
c. ja-bruk-	「跪く」	>>	ju-barrik-	「跪かせる」
ju-ba:rik-	「祝福する ²⁵⁾ 」	>>	ju-barrik-	「祝福を請うて祈る」

(15) maʔbaʕ-/maʔa:biʕ-	「調理場.SG/PL」	vs.	miʔbaʕ-/maʔa:biʕ-	「調理器.SG/PL」
ʕa:tam-/ʕawa:tim-	「指輪.SG/PL」	vs.	ʕa:tim-at-/ʕawa:tim-	「エピソード.SG/PL」
ʕa:lim-/ʕulama:ʔ-	「学者.SG/PL」	vs.	ʕali:m-/ʕulama:ʔ-	「知っている.SG/PL」
ħakam-/ħukka:m-	「審判員.SG/PL」	vs.	ħa:kim-/ħukka:m-	「統治者.SG/PL」

24) やや稀ながら、比較級形成でも jadd-i:j-/ʔajadd-「真剣な／より真剣な」vs. jadi:d-/ʔajadd-「新しい／より新しい」のような例もみられる。

25) この第 III 型動詞自体は第 I 型動詞 ja-bruk- からの相互行為的な適用態派生（「～に対して跪く」）、あるいは名詞 barak-at-「祝福」からの出名動詞派生とみなせる。

3.2. 接頭辞・接尾辞の忌避と短縮

アラビア語では貫通接辞が支配的であることと表裏一体の事実として、接頭辞・接尾辞のインベントリーがごく少数である点が挙げられる (cf. 2.1 節)。

特に、語幹側の形式を問わずに付加される派生接辞は関係形容詞接尾辞 *-i:j-* と名詞クラス接尾辞 *-at-* (女性単数・男性複数など、cf. Takashina 2020–2021) に限られ、しかも (16) に示す通りこの順でしか付加できず、逆の場合には *-at-* は削除される。

- (16) *kita:b-* 「本、啓典.SG」 >> *kita:b-i:j-(at-)* 「啓典的な(.F)」
kita:b-at- 「書き仕事、事務」 >> *kita:b-i:j-(at-)* 「書き仕事、事務的な(.F)」
kutub- 「本、啓典.PL」 >> *kutub-i:j-* 「書店員.SG」 (PL. *kutub-i:j-at-*)
maktab- 「事務所」 >> *maktab-i:j-(at-)* 「事務的な(.F)」

以下の例が示すように、これらの接尾辞をもつ語が入力となって貫通接辞が付加される場合には短縮が行われる²⁶⁾。結果として、(18) や (19) の例が示すように、単純に出力だけをみれば入力候補は複数あり、意味の予測は不可能なことも多い²⁷⁾。

- (17) a. SG. *kati:b-at-* PL. *kata:ʔib-* (**kata:bit-*) 「戦隊」
 SG. *risa:l-at-* PL. *rasa:ʔil-* (**rasa:lit-*) 「手紙」
 SG. *ʃa:ʃir-at-* PL. *ʃawa:ʃir-* (**ʃaʃa:rit-*) 「女性詩人」
 b. SG. *χa:rij-i:j-* PL. *χawa:rij-* (**χara:ʔij-*) 「ハワーリジュ派」
 SG. *raʃi:d-i:j-* PL. *raʃa:ʔid-at-* (**raʃa:dij-at-*) 「ラシャイダ部族」
 SG. *ma-ʔrib-i:j-* PL. *maʔa:rib-at-* (**ʔara:biʔ-at-*) 「モロッコ人」

- (18) a. *ṭabaq-* 「覆い」 >> *ju-ṭabbīq-* 「覆う」
ṭabaq-at- 「層」 >> *ju-ṭabbīq-* 「折りたたむ」
 b. *raqm-* 「数」 >> *ju-raqqim-* 「数値化する」
raqm-i:j- 「デジタルの」 >> *ju-raqqim-* 「デジタル化する」
 c. *haqi:q-at-* (または *haqq-*) 「真実」 >> *ju-haqqiq-* 「真実と認める」
haqi:q-i:j- 「本当の」 >> *ju-haqqiq-* 「実現させる」

26) ただし *-i:j-* の場合、SG. *barr(-i:j-at-)* / PL. *bara:rij-* 「原野」、SG. *ta:q(-i:j-at-)* / PL. *ṭawa:qi(:)j-* 「頭蓋帽」など化石化した例では /j/ が「抽出」されることがあるが、*-at-* にはこのような例は見られない。なお、*-at-* の異形態 *-t-* をもつ少数の名詞 *ʔuʔt-* 「姉・妹」(cf. *ʔaχ-* 「兄・弟」) や *bint-* 「娘」(cf. *(ʔi)bn-* 「息子」) も、接尾辞 *-i:j-* (*ʔaχaw-i:j-* 「兄・弟・姉・妹的な」、*banaw-i:j-* 「息子・娘的な」) や抽象名詞パタン *CuCu:C-at-* (*ʔuʔu:w-at-* 「兄・弟・姉・妹であること」、*bunu:w-at-* 「息子・娘であること」) については、*-t-* が失われ、性は中和する (ただし現代語では *ʔuʔt-i:j-* 「姉・妹的な」、*bint-i:j-* 「娘的な」等もみられる)。

27) (18) について査読者より逆の派生方向の可能性について指摘があったが、第 II 型は出名動詞としての機能が認められるのに対し、*CaCaC(-at-)* は普通名詞を形成する貫通接辞としての生産性を認めにくいため、逆の方向性を想定するならば説明としては極めてアドホックになる。なお、本稿では逐一派生の根拠は示さないが、最節性をその認定基準としている。

- (19) dawl-at- 「国家.SG」 >> duwal- 「国家.PL」
 >> duwal-i:j- (dawl-i:j-) 「国際的」 >> tadwi:l- 「国際化」

なお、-at- と -i:j- も語幹形式に影響を与えることがある。-at- は（生物的な）女性単数を表す場合には、単純に男性形に付加されるのみであるが、この要素が男性複数形や非生物名詞に現れる場合、その語幹形式は何らかの貫通接辞を含む（詳細は高階 2020–2021 参照）。-i:j- は、単純に語幹に付加される場合も多いが、(20) のように特に基礎語彙や古典的な語彙では、語幹を CV(C)CaC- のような形式に変形する（V スロットは入力語幹の母音が「転移」する）。

- (20) a. malik- 「王」 >> malak-i:j- 「王（族）の」
 madi:n-at- 「町」 >> madan-i:j- 「町の、市民的な」
 b. sulajm- 「スライム（人名）」 >> sulam-i:j- 「スライム族の」
 ḥaḍramawt- 「ハド라마ウト（地方）」 >> ḥaḍram-i:j- 「ハド라마ウトの」
 c. ʔab- 「父」 >> ʔabaw-i:j- 「父の、父系の」
 luḡ-at- 「言語」 >> luḡaw-i:j- 「言語的な」
 d. nabi:j- 「預言者」 >> nabaw-i:j- 「預言者の」
 tarbij-at- 「教育」 >> tarbaw-i:j- 「教育的な」

この他に派生接辞の候補としては、場所・時間名詞接頭辞と呼べそうな要素 ma-、道具名詞接頭辞と呼べそうな要素 mi-、派生動詞に現れる分節音要素（ʔ(a)-, t(a)-, n-, -t-, st-）、形容詞の一部を形成する ʔa-, -a:w- (-a:ʔ-), -a:n-, -aj- (-a:) などの要素を認めうるが²⁸⁾、いずれもホスト側に現れる構造はごく少数に限定されている。例えば、ma- は (21) が示すように入力の形に関わらず -CCVC(-at-) に限られるため、むしろパターン maCCVC(-at-) の一部と考えたほうが単純である²⁹⁾。

- (21) a. ja-ktub- 「書く」 >> ma-ktab- 「机」
 b. ka:tib- 「事務（人）、書記」 >> ma-ktab- 「事務所」
 c. kita:b- 「本」 >> ma-ktab-at- 「書店、図書館」

28) 定冠詞、所有代名詞、1 拍からなる前置詞・接続詞類は接語（clitic）といえるため、ここでの議論からは除く。上に挙げた接辞類はいずれもセム祖語に再建できるものであり、北西セム諸語やアッカド語に見られる抽象名詞語尾 *-u:t や副詞語尾 *-i:t はアラビア語では生産的ではないことから（cf. Lipiński 1997）、アラビア語はセム祖語から接辞の種類を減らした可能性も指摘できる。ただし、近代には翻訳借用により否定形容詞接頭辞 la:- （e.g., la:-sa:m-ij- 「反セム主義的な」）などの接頭辞も生み出された例やオスマン語からの借用の例（-ji:j- 関係形容詞・人間名詞）も知られる。なお、ヘブライ語はアラビア語より接尾辞が豊富である（cf. 佐々木 1994）。

29) (21b) の入力には GER. kita:b-at- 「事務仕事」も想定できる（動詞 ja-ktub- 自体には「事務仕事」の含意はないため、これを直接の入力形式とする説明は最節的でない）。なお、「語根・パターン」モデルでは maktab- も maktab-at- も √ktb からの派生と説明される。Larcher (2006) は maktab-at- は kita:b- からの派生だと指摘する一方、ma-ktab- の多義性については説明していない。

なお、以下 (22) に示すようにこれらの疑似接辞的要素は、(17) とは対照的に、複数形形成における貫通接辞付加においても削除されない。

- (22) SG. **ma**-ktab- PL. **maka**:tib- 「机、事務所」
 SG. **mi**-knas-at- PL. **maka**:nis- 「箸」
 SG. **ta**-qli:d- PL. **taqa**:li:d- 「伝統」
 SG. **ʔa**-kbar- PL. **ʔaka**:bir- 「最大の」
 SG. **sulṭ**-a:n- PL. **sala**:ṭi:n- 「スルタン (首長)」
 SG. **ṣahr**-a:ʔ- PL. **ṣaḥa**:rij- 「砂漠」 (基底は SG. /ṣahr-a:w-/ , PL. /ṣaḥa:riw-/)
 SG. **daṣw**-a: PL. **daṣa**:wij- 「宣言」 (基底は SG. /daṣw-aj-/)

屈折接辞としては動詞主語人称接辞・法語尾、分詞接頭辞 (mu-)、名詞類のクラス・数・格語尾があるが、状況は並行的である。例えば、主な名詞類の格屈折は、不定の場合に主格・属格・対格が弁別される「三段変化」型と、主格・斜格 (属格・対格が同形) のみが弁別される「二段変化」型に大別されるが、語幹のパターンや意味からいずれの屈折タイプであるかが大部分については予測できる³⁰⁾。

- (23) 主格 ma-ktab-un kati:b-at-un maka:tib-u kata:ʔib-u
 属格 ma-ktab-in kati:b-at-in maka:tib-a kata:ʔib-a
 対格 ma-ktab-an kati:b-at-an maka:tib-a kata:ʔib-a
 「机.SG」(三段) 「戦隊.SG」(三段) 「机.PL」(二段) 「戦隊.PL」(二段)

3.3. 貫通接辞のホストの認定の難しさ

2 節で紹介したとおり、アラビア語型形態法においては何が貫通接辞のホスト、つまり「入力」となるかという問題については、理論ごとに多様な説明が行われてきた。本節では、入力 (と出力) はどのような性質をもつか、という問題について、これまでの議論で十分指摘されてこなかった点について記述的に議論する。

3.3.1. 入出力の方向性の同定

派生関係にある二つの語幹同士の入出力関係は一般に形式的・意味的有標性の原則から推定されるが、アラビア語の場合、短縮が生じるため一見してどちらが入力か判断することは困難である。しかし、ある語幹については何らかの意味をもつ貫通接辞が抽出できるのに対し、そうした分析が不可能なものもある³¹⁾。この場合、後者が明

30) 二段変化型は CaCa:Ca:(C)- パターン、名詞・形容詞語尾 -a:ʔ-, -a:n-, 女性人名、などの形式的ないし意味的基準で大部分が判定できる。三段変化型はそれ以外のあらゆる形式に現れる。名詞クラス・格変化・数標示 (双数・複数) が融合した接尾辞類も存在するが、ここでは省略する。

31) こうした分析を徹底すれば、無数のクランベリー形態素 (cranberry morpheme) が存在することになる。Heath (2003) は *kita*:b- 「本」 などについても、CaCa:C が特定の意味を持つといえないため形態素として認めない (ja-ktub- 「書く」との共時的「派生関係」を認めない) という議論を行

らかに「入力」であるといえ、(本来的には) それ以上意味的には分けられない単位として、通言語的な意味での「語根」と呼ぶことも可能であろう。

典型的な例として、(24) アラビア語の数詞語根については、明らかに基数形が多様かつ予測不可能な語形をもち、分数・序数・「n 角形」などの語形は一定の貫通接辞により説明できる。類例としては (25a) 不変化詞類や (25b, c) 借用語名詞、(26) 派生名詞から派生した動詞 (IPFV. ju-CaCCiC-) も挙げられる。2.3 節で紹介したとおり、こうした例はセム語学では「二次語根」とよばれることがある³²⁾。

- (24) 基数 分数 序数 n 角形
- θala:θ- 「3」 θulθ- 「1 / 3」 θa:liθ- 「3 番目」 mu-θallaθ- 「三角形」
- ʔarbaʕ- 「4」 rubʕ- 「1 / 4」 ra:biʕ- 「4 番目」 mu-rabbaʕ- 「四角形」
- χams- 「5」 χums- 「1 / 5」 χa:mis- 「5 番目」 mu-χammas- 「五角形」
- (25) a. sawfa [未来] >> ju-sawwif- (GER. taswi:f-) 「延期する」
- bajna 「の間に」 >> ja-bi:n- (GER. bajn-) 「別れる、分けられる」³³⁾
- hajta 「どうぞ、おいで」 >> ju-hajjit- (GER. tahji:t-) 「呼ぶ」
- fa=ða:lika 「つまり (fa=) それは (ða:lika)」 >> faðlak-at- 「要約」
- b. ʕa:z- 「ガス」 >> ju-ʕawwiz- (GER. taʕwi:z-) 「ガス化させる」
- ʔiju:n- 「イオン」 >> ju-ʔajjin- (GER. taʔji:n-) 「イオン化させる」
- c. ʔamri:ka: 「米国」 >> ja-ta-ʔamrak- (GER. taʔamruk-) 「アメリカ化する」
- ʔuksi:d- 「酸化物」 >> ju-ʔaksid- (GER. ʔaksad-at-) 「酸化させる」
- fajlasu:f- 「哲学者」 >> falsaf-at- 「哲学」、ju-falsif- 「哲学的に考える」
- (26) ja-rkuz- 「集中する」 >> ma-rkaz- 「中心」
- >> ju-markiz- / ja-ta-markaz- 「中央集権化させる／する」
- ja-rhab- 「広い」 >> ma-rhab-an 「ようこそ」(字義的には「広い場所を」)
- >> ju-marhib- ~ ju-raħhib- 「歓迎する」
- ja-rjah- 「より重い」 >> ʔurju:h-at- ~ marju:h-at- 「シーソー」
- >> ja-ta-ʔarjah- ~ ja-ta-marjah- 「揺れる」

っている。ただし、この CiCa:C- については形態素と認めるべき別の理由もある (3.5 節参照)。

32) 伝統的なアラビア語辞書では「子音語根」順 (借用語は文字順) に記述されるため、派生関係とは逆、または派生関係が参照不可能になっていることも屢々である。例えば Wehr (1994) では、ʕa:z- は文字順 (ʕʔz, p. 777)、ju-ʕawwiz- は「子音語根」順 (ʕwz, p. 805) に挙げられている。ʔamri:ka: (ʔmrjkʔ) は ja-ta-ʔamrak- (ʔmrk) と ʔamarillis- 「アマリリス」(ʔmrils) の次に挙げられる。sawfa, hajta, ʔiju:n- は各派生動詞の下位に挙げられる。Wehr (1994) には修正 (相互参照の充実など) の余地があるにしても、この問題はアラビア語の構造に起因するものである。

33) 伝統的なセム語研究では前置詞 bajna は逆に動名詞 bajn- からの文文化と説明されるが、この「語根」はセム祖語に遡らず (東セム語に在証されない)、かつ前置詞形のみを欠く言語群も知られず、決定的な説明ではない。ここでは、むしろこの前置詞はセム祖語に遡りうる前置詞 *bi (アラビア語 bi) と双数対格形 *-ajn(V) (アラビア語 -ajni) から説明されるべきものと考えられる。

3.3.2. 入出力の方向性が流動的でありうることを示す例

さて、こうした事例からは、アラビア語においても語彙を少数の（通言語的な意味での）語根に還元するような分析が可能に見える。しかし実際には、アラビア語ではこのように入出力が一意に認定できる派生関係はむしろ例外的である。

これまでに見てきたように、アラビア語名詞については基本的には単数形が入力となり、CaCa:Ca(:)C- のような貫通接辞により複数形が形成される。しかし、(27) など一部の借用語には、語形の類似から複数形名詞として解釈されつつ借用され、後に単数形が形成されたと考えるべきものがある（cf. Jeffery 1938=2007, Tafazzoli 1986=2011）。ただし、単数形に現れる形式はランダムであり、恐らく音韻的に似た別の語との類推によって形成されたものだと考えられる。

- (27) SG. firdaws- PL. fara:di:s- 「天国」（ギリシア語 παράδεισος）
 SG. ja:mu:s- PL. jawa:mi:s- 「水牛」（中期ペルシア語 *gāw-mēš）
 SG. bajdaq- PL. baja:diq- 「歩兵」（中期ペルシア語 *payādag）
 SG. dirham- PL. dara:him- 「ドラクマ（貨幣単位）」（ギリシア語 δραχμή）
 SG. balḡam- PL. bala:ḡim- 「痰」（ギリシア語 φλέγμα）
 SG. jumruk- PL. jama:rik- 「関税」（ギリシア語 κομμέρκιον）

こうした入出力関係の逆転可能性は、弱子音の交替からも支持できる。アラビア語では /w/ は環境により /ʔ/ や /j/ と交替するが、この現象は入力の同定に役立つ場合がある。例えば (28) の第 II 型動詞は第 I 型動詞自体ではなくその名詞・形容詞形（アラビア語の一般的な音韻規則により、w → j の音韻交替を引き起こしうる環境となる）を経由したと考えざるを得ない³⁴⁾。

(28) 第 I 型動詞 >> 名詞・形容詞形 >> 第 II 型動詞

- ja-qu:m- 「立つ」 >> qajjim- (/qawi:m-/) 「顕著な」 >> ju-qajjim- 「高く評価する」
 ja-su:s- 「治める」 >> sija:s-at- (/siwa:s-at-/) 「政治」 >> ju-sajjis- 「政治化させる」
 ja-hu:k- 「編む」 >> hija:k-at- (/hiwa:k-at-/) 「編み物」 >> ju-ḥajjik- 「編む」

ひとつの興味深い例として、(28) の出勤名詞（de-verbal noun）については、単数形ではこの音韻変化が生じているにも関わらず、複数形ではそうっていない。つまり、複数形は動詞から直接派生しており、複数形が単数形の入力であるとまで主張すべき根拠はないものの、単数形が複数形の入力であるとは分析できない³⁵⁾。

34) 直接の派生の場合には ju-CajjaC ではなく ju-CawwiC- が期待される（2.3 節参照）。子音の交替を含まない並行例には、ja-ḥdur- 「(その場に) 来る、いる、ある」 >> ḥa:dir- 「(その場に) 来ている、いる、準備できている」（分詞形） >> 第 II 型動詞 ju-ḥaddir- 「準備する」などがある。

35) それぞれ動名詞／抽象名詞 mawt- 「死」、kajs- 「賢さ」、zawr-at- 「訪問」、hija:m- 「狂おしい恋」との類推を想定することも不可能ではない。

- (31) 完了形 未完了形
- | | | |
|------------------------------------|------------------------------|----------------|
| daʃaw- | ja-dʃuw- | 「呼ぶ」 |
| duʃij- (/duʃiw-/) | ju-dʃaj- (/ju-dʃaw-/) | 「呼ばれる」(受動態) |
| (?i)ddaʃaj- (/(?i)ddaʃaw-/) | ja-ddaʃij- (/ja-ddaʃiw-/) | 「呼びつける」(自己利益態) |

3.3.3. 第Ⅰ型動詞（および派生名詞）

一部の語幹基盤モデルでは第Ⅰ型動詞未完了形 (ja-CCVC-) が「最も基本的な語幹」だと主張されることがあるが (2.3 節)、この主張は妥当だろうか。まず第Ⅰ型動詞未完了形は必ずしも非派生動詞ではなく、(32a) 借用語、(32b, c) 基礎語彙的な名詞、(32d) 不変化詞、(33) オノマトペ起源と考えられる例が存在し、これらは二次的である。さらに、(32c,d), (33) のように完了形を経たと考えるべきものもある。

- (32) a. damɤ-at- 「印鑑」 (トルコ語 *damga*) >> ja-dmuɤ- 「押印する」
 sɨŋ- 「牢獄」 (Gk. *σίγνov*) >> ja-sɨŋ- 「牢獄に入れる」
 b. milh- 「塩」 >> ja-mluh- 「しょっぱくなる」
 raʔs- 「頭」 >> ja-rʔas- 「率いる」 (cf. raʔi:s- 「頭領」)
 nahr- 「川」 >> ja-nhar- 「流れ出す」
 c. ba:ba: 「パパ」 >> ju-baʔbiʔ- (PFV. baʔbaʔ-) 「「パパ」という」
 d. la: 「否定」 >> ja-ʔluw- (PFV. ʔala: (ʔalaw-)) 「しない、厭う」
 ʔa:h 「嗚呼」 >> ja-ʔu:h- (PFV. ʔa:h-) 「嘆息する、嗚呼という」
- (33) PFV. ʃawa: (ʃawaj-) IPFV. ja-ʃwɨj- 「(犬が) 吠える」
 PFV. qahqah- IPFV. ju-qahqih- 「ガハガハ笑う」

なお、(34) のように借用語やオノマトペから派生した第 I 型動詞であっても完了形のほうが二次的に形成されたと考えるべき例も明らかに存在する。

- (34) a. PFV. ha:d- IPFV. ja-hu:d- 「ユダヤ教徒である」 (cf. jahu:d- 「ユダヤ教徒.PL」)
 PFV. ʃa:t- IPFV. ja-fu:t- 「シュートする (球技)」 (口語的か)
 b. PFV. fasaw- IPFV. ja-fsu: 「すかしつ屁をする」
 PFV. taff- IPFV. ja-tuff- 「プツと吐く」

以上のような例からは、第 I 型動詞未完了形が必ず最も基本的な形式である、とはいえないことが明らかである。第 I 型動詞は PFV. CaCVC-, IPFV. ja-CCVC- 等のようにスキーマ化可能であり、かつ少なくとも「動詞」という機能を与える形式であるため、このスキーマを一種の貫通接辞であると考えることに問題はない。

実際に、(35) や (36a) のように語源を共有していると考えられる複数の第 I 型動詞が存在することもあり（定形としては完了形のみが異形態をもつ）、この場合それぞ

れの動詞形が何らかの貫通接辞を含んでいると考える必要がある³⁷⁾。また、(36) のように動名詞形でのみ多義性が解消するといった動詞群も存在する³⁸⁾。

- (35) a. PFV. samar- IPFV. ja-smur- GER. samr-, sumu:r- 「晩にお喋りする」
 PFV. samur- IPFV. ja-smur- GER. sumr-at- 「茶色い」
 b. PFV. kabar- IPFV. ja-kbur- GER. kabr-, kibar, kabr-at- 「年長だ」
 PFV. kabur- IPFV. ja-kbur- GER. kubr-, kibr-, kaba:r-at- 「大きい」
 c. PFV. qadam- IPFV. ja-qdum- GER. qadm, qudu:m 「先んずる」
 PFV. qadum- IPFV. ja-qdum- GER. qidam 「古い」
 PFV. qadim- IPFV. ja-qdam- GER. qudu:m, qidma:n, maqdam 「やってくる」
- (36) a. PFV. ʔarub- IPFV. ja-ʔrub- GER. ʔarb- 「立ち去る」
 PFV. ʔarub- IPFV. ja-ʔrub- GER. ʔuru:b- 「(日が) 沈む」
 PFV. ʔarab- IPFV. ja-ʔrub- GER. ʔara:b-at- 「奇異だ」
 b. PFV. ʔaʔab- IPFV. ja-ʔʔub- GER. ʔuʔb-at- ~ ʔaʔa:b-at- 「スピーチする」
 PFV. ʔaʔab- IPFV. ja-ʔʔub- GER. ʔiʔb-at- ~ ʔaʔab- 「(女性と) 婚約する」

ただし、動名詞形自体も CVCC(-at)-, CVCaC-, CuCu:C-, CaCa:C(-at)- など有限の貫通接辞に還元できる。つまり、動詞類については、「貫通接辞を欠く語幹」を認定できないのである。一旦、アラビア語における記述的なレベルでの語根認定の可能性について理論中立的にまとめておくなら、数詞・借用名詞・不変化詞・基礎語彙的名詞・オノマトペ等については語幹かつ（通言語的な意味での）語根である形態素が認定できるが、動詞および出勤名詞、あるいは動詞と同源の名詞類（形容詞類を含む大部分の名詞類）については多くの場合困難である、といえる³⁹⁾。

古典的な（形態素を前提とする）形態理論を採るならば、非派生動詞類については、その第 I 型に現れる子音群を語根とせざるを得ない。この語根が語幹たりえず、ごく抽象的な意味をもつこと自体は通言語的には奇異ではなく、(13) 英語 *nomin-* や (14) スワヒリ語 *-tu*, *-ti* を語根とよびうることに並行的である。伝統文法の「語根・パタン」モデルとは、この分析を敷衍したものであるといえる。もちろん、数詞等の語形成に範をとり、動詞類についても動名詞を語根と同一視するという分析も理論上は可能である。しかし、それらの形式は、それから「派生」した諸形式からは最も推定しにくい形式であり、辞書学的にはこの説明が採られなかった理由は明白である。

37) 第 I 型動詞の動名詞形も語彙的に決定されており、これを基底とする分析も十分な根拠がある。

2.3 節で紹介したとおり、伝統文法で動名詞形が基底とされたのは恐らくこのためである。

38) 形容詞／人間名詞形については *kabi:r-*「大きい、年長だ、(ボス、年長者)」、*ʔaʔi:b-*「スピーチする人、婚約者(.M)」のように必ず同形になる。

39) ある名詞について、それが基礎語彙的な名詞（派生を含まない）か、出勤名詞かを確定することは困難な場合も多い。例えば *hulm-*「夢」と *ja-hlum-*「夢を見る」は同等に基本的な概念であり、客観的にいずれからいずれが派生したと結論づけることはできない。

通言語的に問題なのは、大部分の動詞類・名詞類がこうした語幹たりえない（かつ品詞性を欠く）語根をもつという点である。アラビア語型形態法においてこうした語根が支配的となったメカニズムに関する示唆は 3.5 節にて紹介したい。

3.4. 派生語をホストとする貫通接辞付加の諸問題

アラビア語において派生語が貫通接辞のホストになりうることはこれまでの事例で示唆されているが、本節ではいくつかの注目すべき例について補足的に記述を行う。

3.4.1. 貫通接辞付加の循環性

先に (26) のように出動名詞から動詞が派生（再動詞化）される場合、貫通接辞が交替していれば派生関係は明瞭である。(25) や (37) は同様に出名動詞から動名詞ないし抽象名詞が形成（再名詞化）された例といえるだろう。

- (37) fams- 「太陽」 >> ja-fmis- 「太陽が照る」 >> famas- 「日照」⁴⁰⁾
 milh- 「塩」 >> ja-mluh- 「しょっぱくなる」 >> mulu:h-at- 「しょっぱさ」
 si:n- 「監獄」 >> ja-sjun- 「投獄する」 >> sa:n- 「投獄」

しかし、再名詞化・再動詞化においては、(38) のように同じ貫通接辞が循環的に与えられ、結果的に派生の痕跡が残っていないと考えられる場合もある。

- (38) a. ?akl- 「食べ物」 >> ja-?kul- 「食べる」 >> ?akl- 「食べること、食事」
 bawl- 「尿」 >> ja-bu:l- 「放尿する」 >> bawl- 「放尿（すること）」
 b. ju-?arriχ- 「日付を付ける」 >> ta?ri:χ- 「日付を付けること、歴史（記述）」
 >> ju-?arriχ- 「歴史を記述する」
 ju-slim- 「委ねる、帰依する」 >> ?isla:m- 「帰依、イスラーム」
 >> ju-slim- 「ムスリムである」

アラビア語では基本的な語が専門的な術語に転用されることが多いが、その多義化した語と派生関係にある語も同時に多義化する（別の形式が模索されない）という傾向がある。この傾向も、上で述べた派生の循環性に関わる現象だと考えられる。

- (39) masi:h- 「塗油された、基督」 >> ju-massih- 「塗油する、基督教徒化させる」
 kusl- 「入浴、(宗教的) 清め」 >> ja-ktasil- 「入浴する、清めを行う」

40) 査読者からは、「太陽」>>「日照」>>「照る」の順とする分析の可能性が指摘された。この例に限ってはこうした分析も可能に見えるが、そうすべき強い動機はない。一方で、(37, 38) の「監獄、食事、放尿」は明らかに動作性を含むため、動詞化を経た再名詞化を想定したほうが単純であり、これらとの並行性を考慮するなら「照る」>>「日照」の順の派生が最節的な説明である。

3.4.2. 貫通接辞同士の（非）段階性

アラビア語動詞形態法では、再帰・自己利益態を表す疑似的接辞 *t(a)-* が現れることが知られる。伝統的に第 V 型・第 VI 型と呼ばれる動詞形式は、それぞれ第 II 型・第 III 型動詞に *-ta-* が付加されたものと説明されることが多い。しかし、(40b) のように第 II 型・第 III 型から直接派生していない第 V 型・第 VI 型動詞も稀ではない。

- (40) a. *ju-ʕallim-* 「教える」(II) >> *ja-ta-ʕallam-* 「学ぶ」(V)
 ju-ka:tib- 「～に手紙を書く」(III) >> *ja-ta-ka:tab-* 「文通する」(VI)
 b. *qubl-at-* 「キス」(出動名詞) >> *ju-qabbil-* 「キスする」(II)
 ja-qbal- 「受ける」(I) >> *ja-ta-qabbal-* 「受け取る」(V)
 ʕahī:r- 「援護者」(出名名詞⁴¹⁾) >> *ju-ʕa:hir-* 「援護する」(III)
 ja-ʕhar- 「現れる」(出名動詞) >> *ja-ta-ʕa:har-* 「みせかける」(VI)

これと並行的に、ある種の出動名詞といえる、いわゆる分詞（人間名詞／形容詞）形についても、(41b) のように動詞形が在証されないものがある。

- (41) a. *ja-ktub-* 「書く」 >> *ka:tib-* 「書き手」(能動分詞・行為者名詞)
 ja-ʔkul- 「食べる」 >> *ʔakka:l-* 「大食な」(習性形容詞・職業名詞)
 b. *faras-* 「牝馬」 >> *fa:ris-* 「騎士」
 quṭn- 「綿」 >> *qatṭa:n-* 「綿屋」

3.4.3. 複合の忌避

以上では基本的に 1 語からなる入力的事例に限ってきたが、アラビア語ではある種の句が入力となって、異分析的に語形成が行われていることも稀ではない⁴²⁾。特に (42) 宗教的な文脈で用いられる文言などの略語的発話動詞や (43) 2 語からなる人名に由来する関係形容詞などが有名である。

- (42) *bi=smi lla:hi r=rahma:ni r=rahi:m* 「慈悲深く慈愛あまねき神の名において」
 >> *ju-basmil-, ju-sammij-* (GER. *basmal-at-, ta-smij-at-*) 「[上記] を唱える」
 ʔas=sala:mu ʕalaj=kum (...) 「汝(ら)の上に平安あれ」(挨拶)
 >> *ju-sallim-* 「[上記のことばで] 挨拶する」(動名詞: *tasli:m-*)

- (43) *ʕabd-u lla:h-* 「アブドゥッラー」 >> *ʕabd-al-i:j-* 「アブドゥッラー族の」
 ʔabu: hani:f-at- 「アブー・ハニーファ」 >> *hanaf-i:j-* 「ハナフィー派の」

41) 語源的な語根としては *ʕahr-* 「背中」が想定できる。

42) 生産的な語形成の例ではないためここでの議論と直接には関わらないが、典型的な異分析の例としてはほかに *la: ʕajʔ-* 「何もない (no + thing)」>> *ju-la:ʕij-* 「全滅させる」や *ma: li=* 「～に属する (li=) もの (ma:)」>> *ma:l-* 「財産」(>> *ju-mawwil-* 「財産を与える」) なども知られる。

こうした現象は伝統的には *naht* (かばん語 *portmanteau*) として知られる。アラビア語形態法の今一つの有名な特徴として、生産的な語形成手段としての複合 (*compounding*、つまり二つ以上の語幹の連結) の欠如が挙げられるが、このためアラビア語におけるかばん語形成は単に「複合」とよばれることもある (Ali 2006) ⁴³⁾。

アラビア語の近代化という文脈において、西欧諸語の「複合」の翻訳のためにかばん語形成を生産的に用いることも提案されたが (Ali 2006)、結果的には現在では (44) のようなごく少数の例を除いて用いられない。こうした「生き残った」かばん語は、それを貫通接辞と呼ぶことができるかはさておき、既存の韻律パターン (CaCCaCV:C-, CaCCa:C-, CaCaCa:n-) をもつ点は注目に値する。

- (44) *kahraba:ʔ*-「電気」+ *maḡnaʔi:s*-「磁石」 >> *kahrāʔi:s-i:j*-「電磁気の」
barr-「陸」 + *ma:ʔ*-「水」 >> *barma:ʔ-i:j*-「水陸両用・両生類の」
zama:n-「時間」 + *maḡa:n*-「場所」 >> *zamaka:n*-「時空間」
naql-「移設」 + *ḡarf*-「文字」 >> *naḡḡar-at*-「転写」

複合が忌避され、許されうるかばん語も既存の韻律構造に従うという言語事実は、これまでに指摘した、短縮の選好、接頭辞・接尾辞の (多重付加の) 忌避などと並行的に、貫通接辞の選好と表裏一体だと考えられる ⁴⁴⁾。

3.5. 貫通接辞の動態と同音性・多義性・同義性

3.2 節で述べた通りアラビア語には疑似的なものを含めても接頭辞・接尾辞は極めて少なく、大部分の貫通接辞は三種の音色の母音 /a, i, u/ と長短とその現れる位置の組み合わせという要素によらざるをえず、そのバリエーションは自ら限られる。この結果、アラビア語における貫通接辞の選好は、同音異義や多義を生じている。以下では、貫通接辞の同音性・多義性を生み出すその動態について記述的に論じる。

3.5.1. 同音の別形態素の例

アラビア語の動詞・形容詞類は比較的整然とした貫通接辞パラダイムの体系として記述されてきたが、特に名詞類は一般化がやや困難であることが知られる。その理由の一つは、貫通接辞には複雑な同音異義がみられることに起因すると考えられる。

43) 英語や日本語で複合語にあたる表現はアラビア語では2語以上からなる句 (phrase)、属格 (ないし形容詞修飾) 構造としてしか実現しない (音韻的、形態統語的基準からは「語」といえない)。

(4) の *raʔs-ma:l*-「資本」は典型的な例外であり、口語アラビア語からの借用と考えることもできる (3子音連続は借用語とこの例を除けばアラビア語では許されない)。ただし、同じ属格構造とはいっても、従属部が非参照的 (non-referential) である場合にはやや特殊な形態統語論的ふるまいが見られるため、この事実をもってある種の「複合」構造を認定することも不可能ではない。

44) Bauer (2001) も同様の指摘をしつつ、同じ類型のヘブライ語には他の言語ほどの生産性はないにしても「複合語」が存在することを根拠に疑義を付している。ただし、ここでいうヘブライ語の「複合語」とは属格構造を指しており (従属部は非指示的 (non-referential) な名詞に限られない)、十分な根拠とはいえない。

名詞類（ここでは形容詞形を含む）には (45) CiCa:C- や (46) CuCa:C- といった語形が現れることがあり、作業仮説的には以下のように分類することもできそうである。例えば、(45) 名詞類複数形と第 III 型動名詞に現れる CiCa:C- は一旦同音意義の関係にあると考えることもできる。

- (45) a. 名詞・形容詞複数 kila:b- 「犬.PL」、nisa:ʔ- 「女.PL」、kiba:r- 「大きい.PL」
 b. 第 III 型動名詞 ʃira:ʕ- 「闘争」、siba:q- 「競争」、χita:b- 「スピーチ」
 c. その他動名詞 ʃira:ʔ- 「買うこと」(VIII)、kina:ʔ- 「歌うこと、歌」(II)
 d. その他名詞単数 kita:b- 「本」、miθa:l- 「例」、ʔila:h- 「神」、hima:r- 「ロバ」
 hiʃa:b-, χima:r-, niqa:b- (いずれもヴェールの種類)

- (46) a. 分配数 ruba:ʕ- 「4 つずつ」、χuma:s- 「5 つずつ」、suda:s- 「6 つずつ」
 b. 疾病 ʃuda:ʕ-(un) 「頭痛」、suʕa:l- 「咳」、zuka:m- 「風邪」
 c. その他 nuha:s- 「銅」、tura:b- 「土、埃」、kuba:r- 「巨大な」

しかし、上に示した分類はあくまで恣意的に設定したものであり、これらの分類は動詞類とは異なり屈折クラスを形成しているわけではなく、ある程度の共通性はあっても意味的な傾向がよみとりにくい例 (45c, d) や (46c) も存在する。例えば (45b, c) をひとまとめにしたり、(45d) のうちヴェール類を表すものと ʕiqa:l- 「イカール (男性頭巾留めの輪)」、qina:ʕ- 「面」、liba:s- 「着物」を含めて「衣類・装飾品名詞」、または qita:r- 「列車」や sila:h- 「武器」を含めて緩やかに「道具名詞」とラベル付けしたりすることも可能だろう。

逆に、ほぼ同形で同義であるにも関わらず、異なる形態素として認めるべき場合も存在する。名詞複数形を表す貫通接辞に CuCaC- があるが、形態論的なふるまいからは以下の 3 種に分類できる。すなわち、(47a) は二段変化型 (3.2 節 (23) 参照) であり、ʔaCCaC- 型単数に対する複数形であるのに対し、(47b) は三段変化型で CuCC-at- 型単数形に対する複数形である。これと並行的な (48) のような単複対応も存在することから、(47b) における母音 u の表れは単数形の u から説明されるべきもの (ある種の「転移」) だと考えられる。これに対して、(47c) もまた三段変化型だが、対応する単数形からの「転移」は見られないため、(47b) とは派生方法が異なる、つまり別形態素と考える必要がある。

- (47) a. ʔuwal- 「一番.PL」(SG. ʔawwal-), ʔuxar- 「別の.PL」(SG. ʔa:χar-)
 b. quṭaʕ- 「切り株.PL」(SG. quṭʕ-at-), ʔumam- 「共同体.PL」(SG. ʔumm-at-)
 c. judad- 「新しい.PL」(SG. jadi:d-), ʃuqaq- 「アパート.PL」(SG. ʃaqq-at-)

- (48) SG. qiṭʕat- vs. PL. qitaʕ- 「一切れ、区切り、師団」

このように、貫通接辞は意味と形式の対応が混沌としたものになっていることがある。上に紹介したケースについては、語源的な関係性が極めて不透明であり、単に同音だが別の形態素と考えるべきものである。

3.5.2. 貫通接辞の多義化

上で論じた例とは逆に、貫通接辞には本来一形態素であるものが多義化するという傾向も顕著にみられる。一つのメカニズムとしては、貫通接辞がやや抽象的な機能をもつ場合、入力となる語幹の意味に従って異なる解釈が生まれうる点にある。この傾向は特に動詞パラダイムについて顕著であるように見える。

例えば、第 II 型 (ju-CaCCiC-) 動詞は入力のタイプ別に典型的な機能が異なり、(a) 名詞類が入力となる場合には作為動詞 (factitive、具現化や実装・実践などの意味をもつ)、(b) 発話全体 (の一部) が入力となる場合には発言・判断動詞 (delocutive 「～という、判断する」)、(c) 動詞が入力となる場合には多回数動詞 (frequentative) ないし／かつ使役動詞 (causative) となる傾向がある。機能 (b), (c) は抽象的なレベルではおそらく (a) に還元可能であり、入力の性質による機能分化の例といえそうである。(a) の機能一つをとっても、入力となる名詞次第で、派生動詞の具体的な意味が大きく異なることは、(49) に示すとおりである。

- (49) jana:z-at- 「葬礼」 >> ju-janniz- 「葬礼を執り行う」
 ʒajm-at- 「テント」 >> ju-ʒajjim- 「テントを張る」
 farʕ- 「枝」 >> ju-farriʕ- 「(木が) 枝を張る」
 qa:nu:n- 「法」 >> ju-qannin- 「法令化する (他動詞)」
 baʕd- 「部分」 >> ju-baʕʕid- 「部分に分ける」
 qami:ʂ- 「シャツ」 >> ju-qammiʂ- 「シャツを着せる」
 ʂa:bu:n- 「石鹼」 >> ju-ʂabbīn- 「石鹼でこする」
 banj- 「麻薬」 >> ju-banniʒ- 「麻酔をかける」
 jamī:n- 「南」 >> ju-jammin- 「南に行く」

先に 3.1 節 (14) でも紹介したが、貫通接辞の多義性と短縮の選好という傾向は、(50) のように極めて多彩な多義語を発生させるメカニズムとなっている。

- (50) a. ja-ktub- 「書く」 >> ju-kattib- 「書かせる」
 kati:b-at- 「戦隊」 >> ju-kattib- 「戦隊に配備する」
 b. ja-mlik- 「所有する」 >> ju-mallik- 「所有させる」
 malik- 「王」 >> ju-mallik- 「王にする」
 c. kabi:r- 「大きい」 >> ju-kabbir- 「拡大する」
 ʔalla:hu ʔakbaru 「神は偉大なり」 >> ju-kabbir- 「「神は偉大なり」という」

これに加え、貫通接辞の意味が類推によって再解釈されることで多義化するという場合も存在する。例えば (51) は上に挙げた基本的な機能に従って動詞が派生している例だが、(52) はやや逸脱的な意味をもつ派生動詞の例である。(52) は (51) のような別の動詞との類推によって、ある種の「語彙的意味をもつ貫通接辞」が異分析された結果として理解できる。ju-marriḍ-「看護する」については、(53) のような類推式を想定できそうである。

- (51) duḡa:n- 「煙」 >> ju-daḡḡin- 「タバコを吸う」 (作為動詞)
 ʔani:j- 「金持ちだ」 >> ju-ʔannij- 「賞賛する、歌う⁴⁵⁾」(発話動詞)
 ja-rḍaṣ- 「(乳を) 吸う」 >> ju-raḍḍiṣ- 「(乳を) 吸わせる」 (使役動詞)

- (52) ju-daḡḡin- + haḑi:f- 「大麻」 >> ju-haḑḑif- 「大麻を吸う」
 ju-ʔannij- + ʔa:bb-at- 「若い女性」 >> ju-ʔabbib- 「若い女性について熱く歌う」
 ju-raḍḍiṣ- + mari:d- 「病人」 >> ju-marriḍ- 「看護する」

- (53) raḍi:ṣ- 「乳児」: ju-raḍḍiṣ- = mari:d- 「病人」: x, x = ju-marriḍ-

アラビア語の派生動詞型には、ほかにも抽象的な意味とともに極端に具体的な意味をもつ(ある種の語彙的接辞のようにみえる)場合も多いが⁴⁶⁾、通時的にこうした貫通接辞の意味・機能の分化が生じてきたことと関わっていると考えられる。なお、こうした類推は特に (54) のように対となる動詞の場合に顕著に見られる。

- (54) a. ʔa-ftah- 「開ける」 >> ju-fattih- 「(花が) 咲く、開花する」(II)
 ja-ʔmid- 「覆う」 >> ju-ʔammiḍ- 「(花が) 萎む」(II)
 b. ʔa-ftah- 「開ける」 >> ʔa-ftatih- 「開会する」(VIII)
 ja-ḡtim- 「けりをつける」 >> ja-ḡtatim- 「閉会する」(VIII)

接辞の多義化という特徴は、貫通接辞以外のタイプの接辞をもつ言語において生じている例もある。例えば、スワヒリ語ではクラス接頭辞の交替により名詞から名詞が派生することがあるが、(55) ではあたかも 3 / 4 クラス接頭辞が「木」のような意味をもつかのようにふるまっている。スワヒリ語の接頭辞はアラビア語における貫通接辞と同様に閉じたクラスをなしており、両言語における接辞の多義化はこれが原因だと考えられるが、貫通接辞の性質それ自体が系としての閉鎖性(新たな接辞の追加不可能性)と関わっているともいえそうである。

45) 在証はされないが、「金持ちだと言う」からの意味変化と考えて不自然ではないだろう。

46) 例えば、基本的にはある種の適用態の機能をもつ第 III 型動詞が「競争、協同」のようなニュアンスをもつ動詞や「旅行」を意味する動詞の派生に、基本的には相互態の機能を持つ第 VI 型動詞が、「～(ない) ふりをする」を表す動詞の派生に用いられる、など。

- (55) SG. **m-ti** PL. **mi-ti** 「木」(3 / 4 クラス)
 SG. **Ø-nazi** PL. **Ø-nazi** 「ココナツの実」(9 / 10 クラス)
 SG. **m-nazi** PL. **mi-nazi** 「ココナツの木」(3 / 4 クラス)

3.5.3. 混交と貫通接辞の発生

アラビア語ではいわゆる混交 (contamination) ⁴⁷⁾ もよく観察される (cf. Larcher 2006)。これもまたアラビア語形態法の中で貫通接辞が極めて支配的な地位をもつことと表裏一体の現象と考えられる可能性がある。(56) のように借用時期を問わず借用語は音韻論的には単純に予測できない音韻変化 (重子音化、母音の変化など) を見せるが、これらは固有語に既存の語形 (cf. qatṭa:n- 「綿屋」、ka:tib-(at-) 「書き手」、baʿi:d- 「遠い」、hurri:j-at- 「自由」、mu-ka:tab-at- 「文通」) との混交の例である。

- (56) najja:r- 「大工」(シュメール語 *nagar* 「大工」)
 malla:ḥ- 「水兵」(シュメール語 *ma₂-laḥ₄* 「水兵」)
 ta:jin- 「タジン鍋」(ギリシア語 *τάγιον*)
 qa:rib- 「舟」(ギリシア語 *κάραβος*)
 bari:d- 「郵便」(ラテン語 *verēdus* 早馬)
 kulli:j-at- 「(単科) 大学」(ラテン語 *collegium*)
 ta:wil-at- 「テーブル」(イタリア語 *tavola*)
 ka:bił- 「ケーブル」(フランス語 *cable*)
 mu-na:war-at- 「軍事演習」(フランス語 *manœuvre*, 英語 *maneuver* ⁴⁸⁾)

これまで議論してきた通り、貫通接辞は基本的には系としては閉じているが、混交現象により新たな貫通接辞を発生したといえそうな例もみられる。例えば、(57) は固有語に既存の貫通辞ではなく借用語同士の類推から混交が生じたと考えられる ⁴⁹⁾。

- (57) a. ʔisma:ʕi:l- 「イスマイル、イシュマエル」
 ʔisra:ʔi:l- 「イスラエル」
 ʔibra:hi:m- 「イブラヒム、アブラハム」
 b. mindi:l- 「ハンカチ」(ラテン語 *mantēlium*)
 qindi:l- 「ランプ」(ギリシア語 *κάνδηλα*)
 ʔiqli:m- 「地域」(ギリシア語 *κλίμα*)
 ʔinji:l- 「福音書」(ギリシア語 *εὐαγγέλιον*)
 jibri:l- 「ジブリール、ガブリエル (天使名)」
 ʔirbi:d- 「イルビード (地名)」(ギリシア語 *Αρβηλα*)

47) 例えばフランス語 *femelle* が英語に借用された際 *male* との類推で *female* となった現象など。

48) さらに、この語は定動詞 (*ju-na:wir-* 「軍事演習する」) としても用いられる。

49) 固有語 (*ʕinzi:r-* 「豚」など) にも CiCCi:C- 型の語形が現れることもあるが、極めて稀である。

興味深い例として、少なくともセム祖語には再建不可能な、しかしある程度生産性をもつ Ca:Cu:C- という貫通接辞（道具名詞の派生に用いられる）がある。これは、おそらく (58) のような借用語（道具名詞など⁵⁰⁾）から異分析により抽出された新たな貫通接辞の発生の例だと考えることができる。

- (58) a. qa:nu:n- 「法律」（ギリシア語 κανών）
 ša:bu:n- 「石鹼」（ギリシア語 σάπων）
 qa:mu:s- 「辞書」（ギリシア語 ὀκκεανός）
 ba:bu:r- 「蒸気船」（フランス語 vapeur）
 b. ja-ṭhan- 「（粉を）挽く」 >> ṭa:hu:n- 「製粉機」
 ja-nsaχ- 「コピーする」 >> na:su:χ- 「ファックス」
 ja-ḥsib- 「計算する」 >> ḥa:su:b- 「コンピューター」
 ja-ṣruχ- 「叫ぶ」 >> ṣa:ru:χ- 「ロケット」

こうした混交は固有語でも生じてきた可能性は高い。本稿では詳細な比較言語学的分析を行う準備がないが、一例を挙げるならアラビア語 ʔaχ- 「兄・弟」 vs. ʔuχ-t- 「姉・妹」における母音交替は、ʔab- 「父」 vs. ʔumm- 「母」との類推に起因すると考えられる⁵¹⁾。3.5.2 節後半で挙げた例も混交が関わる例と考えることもできる。

解釈を一步進めるなら、以上のような例は、アラビア語（セム語）において「貫通接辞を含む語幹」が選好されてきたことを示しているともいえるだろう。

3.5.4. 同義別形態の存在と形式と意味の多対多対応

先に 3.5.1–3.5.2 節で議論したとおり、貫通接辞は多義性を誘発してきた可能性がある。一方で、異なる貫通接辞同士がほぼ同じ機能・意味をもつことも稀ではない。

典型的な例の一つは複数形貫通接辞の多様性である。複数形パターンは数え方にもよるが 40 種以上が知られ（Wright 1859=1967, part I: 199–234）、単数形に対していずれが選択されるかは語彙的に決定されている。多くの場合、同源の名詞同士は単数・複数形それぞれにおいて異なる形式をとるが、その対応は予想が困難である。(59) のような、学習者泣かせの例は枚挙にいとまがない。

- (59) SG. riʃl- PL. ʔarʃul- 「足」
 SG. raʃul- PL. riʃa:l- 「男」
 SG. ra:ʃil- PL. raʃl- 「歩行者」

50) この他にも、人名（da:wu:d- 「ダーウッド、ダヴィデ」、ha:ru:n- 「ハールーン、アロン」）を含む基督教関連の術語はこの語形をもつものが目立ち、その多くはシリア語（アラム語）から、あるいはシリア語を経由してギリシア語などから借用されたものだと考えられる。ここでは議論の簡略化のため、これらの例については省略する。

51) 多くのセム諸語では基本的に「姉・妹」は *ʔaχ(w)- に単純に単数女性語尾 *-at- を接尾した形式が在証される。ただし、エチオピア・セム諸語ではアラビア語と同様の変化がみられる。

なお、3.2 節で紹介したとおり、複数形では同音異義となる例も少なくはない一方で、(60) のように単数では同音異義（多義語）だが複数形ではそれが解消する、といった例もごく一般的である。

(60) bajt-/buju:t-	「家.SG/PL」	bajt-/ʔabja:t-	「詩行.SG/PL」
ʃa:rib-/ʃawa:rib-	「口ひげ.SG/PL」	ʃa:rib-/ʃarb-	「吞兵衛.SG/PL」
ʔari:b-/ʔuraba:ʔ-	「変な.SG/PL」	ʔari:b-/ʔakra:b-	「異邦人.SG/PL」
ʕa:mil-/ʕumma:l-	「労働者.SG/PL」	ʕa:mil-/ʕawa:mil-	「要素.SG/PL」
ha:mil-/hamal-at-	「運搬人.M.SG/PL」	ha:mil-/hawa:mil-	「妊婦.F.SG/PL」
sabi:l-/subul-	「方法.SG/PL」	sabi:l-/ʔasbil-at-	「水飲み場.SG/PL」
fa:ris-/fawa:ris-	「騎士.SG/PL」	fa:ris-/furs-	「ペルシア人.SG/PL」

この他、第 I 型動詞の動名詞形（形容詞に対する抽象名詞形を含む）などもこれと並行的な現れをもち、Wright (1859=1967, part I: 111–112) は 44 種を数えている。3.5.2 節や 3.5.3 節で紹介したような、類推的な原則に従っているようにみえる (61) のような対義語ペアの例も存在するが、こうしたペアを超えて一般化可能な傾向はみだしにくい (Wright はある程度の一般化を試みているが無理がある)。

(61)	形容詞形	抽象名詞形
a. ʃaʕi:r-	「小さい」	ʃuʕr- ~ ʃiʕar- 「小ささ」
kabi:r-	「大きい」	kubr- ~ kibar- 「大きさ」
b. naʕi:f-	「清潔な」	naʕa:f-at- 「清潔さ」
wasix-	「不潔な」	wasax-at- 「不潔さ」
c. ʔabjaḍ-	「白い」	bajaḍ- 「白さ」
ʔaswad-	「黒い」	sawaḍ- 「黒さ」
d. ʔahmar-	「赤い」	humr-at- 「赤さ」
ʔazraq-	「青い」	zurq-at- 「青さ」

この傾向は、3.5.2–3.5.3 節でみた類推と連続的な現象である反面、3.5.1–3.5.2 節で見た貫通接辞の多義化のメカニズムとは真っ向から対立しており、貫通接辞の性質に由来するものとはいきれない。この問題については、次節にて補足的に論じたい。

4. おわりに

4.1. まとめと言語類型論的示唆

本稿では、アラビア語型形態法について（特に教育分野で）伝統的に行われてきた説明に対する現代の理論言語学的立場からの批判の概略を示し、比較的理論中立的な「貫通接辞」という概念をもとに、アラビア語形態法の類型的特徴に関する言語記述を行った。この結果、アラビア語のような言語において、語形全体を定義するタイプ

の貫通接辞を選好する傾向がみられ、それ自体が (62) に挙げるような言語事実と表裏一体になっている可能性を指摘した。

- (62) a. 短縮が選好される。
 b. 接頭辞や接尾辞（の多重付加）・複合が忌避される。
 c. 貫通接辞の付加の際、入出力に関する一定の方向性を基本的に欠く。
 d. 数詞・不変化詞・基礎語彙的名詞・借用語・オノマトペ等を除く、大部分の語幹は何らかの貫通接辞を含んでいる。
 e. 貫通接辞を含む語幹を選好するような類推（混交を含む）がよく見られる。
 f. 貫通接辞は多義的である、または多義化する傾向がみられる。
 g. そして以上全ての結果、出力から入力形式を推測することは困難になっており、しかも多くの多義語が存在している。

ここで改めて自然形態論（2.4 節）の分析視座を再導入するなら、アラビア語型形態法は、典型的に 1 つの語幹は 1 つ貫通接辞（＋最大 2 つの派生接辞）というシンプル、かつ韻律的にも均整のとれた美しい構造をもつ反面、必然的に記号論的な不透明性（opacity）、すなわち形式と意味との 1 対 1 対応に対する逸脱を誘発している、と結論づけられる。さて、この事実は単純に言語相対性の問題として、特に疑問をもつ必要のない記述的結論だろうか。

語弊を覚悟でロシア・フォルマリズムの概念を援用するのであれば、意味の伝達に形式を優先させるのは「詩的言語」（poetic language）の特徴である。ここで議論しているアラビア語型形態法はその対概念である「日常言語」（ordinary language ないし「実践言語 practical language」）のそれであるにも関わらず、「日常言語」に期待される特徴（意味の伝達を保証するような透明性）を欠いてまで形式美を選好しているのはパラドクシカルである。アラビア語型形態論が（同系の諸言語を除けば）世界に類をみないという経験的事実も、このパラドクスから演繹的に説明可能だろう。

実は、この点は、潜在的には韻律形態論によって既に指摘されているともいえる。韻律構造により定義され、かつ減算的な（語幹の情報を削除するような）「テンプレート形態法」は、切除（clipping）、呼格（vocative）、愛称（hypocoristics）、スラング（argot）形成などの「付録文法的」（extragrammatical）な形態法に特徴的であることが知られてきた（McCarthy & Prince 1986, Dressler 2000）。これらは典型的にはメンバー相互が文脈をよく知る集団内で、脱規範的かつ創造的な効果を企図して実践される言語現象であり、「詩的言語」的特徴をもつことに不思議はない。むしろアラビア語のような威信的な「日常言語」がこうした性質をもつことには、やはりパラドクシカルな意外性があるといつてよいだろう⁵²⁾。

52) ただし議論の方向性は韻律形態論とは逆である。例えば川原（2022）は、「コギャル語」や「赤ちゃん言葉」のような些末にみえる現象が、背景にアラビア語と同じ原理をもつ、という点を「意外性」として提示しているが、本稿では逆に「コギャル語」のような詩的言語がもつ原理を、

言語学にとっての「語」という単位、つまり形態論の重要性を論じた宮岡（2002: 173）は、北米諸語における複雑な形態法（形式と意味の多対多対応など）に関する知見を源泉とする形で、「語」とは意味や機能で定義できるものではなく「カタチ」に過ぎないのであり、この事実が「形態法が「でたらめさ」や不必要・不経済さやあまりない複雑さえ許す下地」となり、ひいては人間言語の「おおきな自由度と幅広い多様性」の原因となっている可能性を指摘している。

近代人文科学としての「正統」な言語学は個々の人類言語に本質的な差異を認めないことを前提としており、それに立脚した韻律形態論や「語幹」基盤モデルのような諸研究による要素還元主義的分析が一定の成果をあげてきたのは明白な事実である。しかし、宮岡の言葉を借りるならば「言語学者の賢しさを嗤うかのような」アラビア語型形態法の「でたらめさ」から、人間言語への洞察を深める機会を逸してはこなかっただろうか。本稿で扱ったアラビア語（型）形態法は、「語」に関する類型論的研究は「語」が意味と形式からなる「記号」という概念と同一視可能か否かというレベルからはじめなければならないことを示唆しているのではないか。

4.2. 今後の課題と歴史言語学的展望

本稿では、議論の単純化のため、特にセム諸語や文語アラビア語の通時的変遷に関するデータは扱わなかった⁵³⁾。その主な理由は、アラビア語を含むセム諸語間では歴史的には相互の借用が頻繁であり、それらの文証は膨大かつ断片的であり、かつ貫通接辞という形態法の性質により、(皮肉なことに、映画『メッセージ』とは対照的に)「過去」が極めて不透明になっているということである。

アラビア語を含むセム諸語には、歴史的に貫通接辞が生産的ではなかった時代は文証されておらず、基本的には同様のシステムが何千年の間保たれ、栄えてきた点は注目に値する。換言するなら、アラビア語のような言語の存在は、「日常言語」としての非能率はマクロなレベルでは必ずしも自然的な淘汰の対象とはならないことを示しているようにも見える。

しかし、少なくともミクロなレベルでは、こうした非能率、特に同音異義の解消を動機としているようにみえる言語変化はアラビア語でも生じている可能性がある⁵⁴⁾。先に 3.2 節や 3.5 節でも紹介したが、アラビア語には「4 子音語根化」、すなわち入力となっている語幹から 3 つではなく 4 つの子音（子音群）をターゲットとして貫通接辞が与えられるという現象がみられ、(63) のように類義語の弁別に役立つこともある。本稿で詳細に通時の変化を追う余裕はないが、印象としては「4 子音語根化」は

アラビア語という日常言語がもつという点に意外性を見出している。

53) 例えば、ふつう *kita:b-* など (1) に示した「*\ktb*」の大部分は、アラビア語固有語というよりはアラム語からの借用、あるいはアラビア語での拡張であると考えられている。本稿に示した事例の多くについてはこうした問題を一旦括弧に括っている。

54) 通言語的にもこうした変化はみられる。例えば、短縮を伴う語形成が解消されてきた例として、英語では *-ate-* 削除規則の廃止 (*educable* > *educatable* 児馬 2015)、日本語では二段動詞の一段化（つまり終止形における *ak-u* > *ak-e-ru* 「開ける」）などを挙げることができる。

恐らく現代アラビア語において生産性が高まっているようにみえる。例えば (64) のような例は、Wehr (1994) などの一般的なアラビア語辞書には在証されないが、近年のアラビア語メディア等では一般的になっている⁵⁵⁾。

- (63) ʕaql- 「理性」 >> ju-ʕaqqil- 「理性を与える」
 ʕaql-a:n-i:j- 「理性的・合理的な」 >> ju-ʕaqlin- 「合理化する」
- (64) ʃaxs-a:n-i:j- 「個人主義的」 >> ju-ʃaxsin- 「個人（主義）化する」
 ʔisla:m- 「イスラーム」 >> ju-ʔaslim- 「イスラーム（主義）化する」
 ma-dras-at- 「学校」 >> ja-ta-madras- 「学校教育を受ける」

また、十分な文証はないが、文語アラビア語のような言語を祖語と考えるならば、口語アラビア語諸方言でも並行的な言語変化が見られた可能性は十分ありうる。例えば、(70) のアラビア語カイロ方言（データは Badawi & Hinds 1986 に基づく）における動詞態交替は、短縮による同音意義化が避けられた言語変化の例とも考えられる。

- (65) 文語 カイロ方言
- | | | | |
|-------------------|----------------------|---------|--------|
| ja-lbas- | ji-lbas | 「着る」 | (能動) |
| ju-lbas- | ji-t-libis | 「着られる」 | (受動) |
| ju-lbis- | ji-labbis | 「着せる」 | (使役) |
| ju-lbas- | ji-t-labbas | 「着せられる」 | (使役受動) |

このほかにも、口語アラビア語諸方言には独自の再分析の例や新たな貫通接辞（の変異）の出現も多く報告されてきている（Heath 1987, Ratcliffe 2013, Davis 2019）。こうした現象にはほかにどのようなものがありうるのか、これらは貫通接辞の構造的弱点を克服する方向に向かっているのか、それとも貫通接辞を放棄する方向に向かっているのかを探ることは、今後の重要な課題である⁵⁶⁾。

もちろん、通言語的に類をみないアラビア語型形態法がどのように出現したかを考えることも、重要な歴史言語学的課題である。この問題はアフロアジア言語学におい

55) 特に IPFV. ju-CaCCiC- (GER. CaCCan-at-) は生産性が上がっている印象も受ける。例えば、「デジタル化」は (18) の IPFV. ju-raqqim- (GER. tarqi:m-) のほか、IPFV. ju-raqmin- (GER. raqman-at-) も一般的になっている。

56) 本稿では詳述する余裕がないが、アラビア語ピジン・クレオールでは貫通接辞の生産性が失われるという傾向もみられる (e.g., Nakao 2017)。「透明性」という概念はクレオールのプロトタイプの特徴として挙げられることもある一方で (McWhorter 2001)、貫通接辞という現象が通言語的に一般的ではないがために、伝統的なクレオール言語学ではこうした現象はピジン・クレオールの「単純化」の例としては十分取り上げられていない。また Souag (2022) は、アラビア語貫通接辞がすでにアラビア語型形態論をもつ言語（すなわちアフロアジア語族の諸言語）以外には生産的な形態法としては借用されないという事実を発見している。このように、貫通接辞の特性に関する理解は、類型論のみならず接触言語学諸領域にとっても有益であるだけでなく、貫通接辞がやはり「例外」的現象であることを示唆している可能性がある。

て広く論じられてきたが、議論に終着点がみえていないとはいえない。この一因は、2.4 節で紹介したとおり、通言語的にこのタイプの形態論がアフロアジア語族の外に発見されていないためであろう。

筆者の知る限り、例えばナイル・サハラ語族のバリ語 (Bari、東ナイル語派；データは筆者のフィールドワークによる) には、(66a) の4例に限られるが一見するとある種の貫通接辞のようにもみえる。歴史的には、これは (66b) のような例にみられる (短縮を含む) 接尾辞 -u が接中辞化し、語全体に母音調和が生じたものである。

- | | | | |
|-----------------|-------|---------|-----------|
| (66) a. lònàsêr | 「兄・弟」 | lùḡàsûr | 「あなたの兄・弟」 |
| kijàsêr | 「姉・妹」 | kijàsûr | 「あなたの姉・妹」 |
| mópè | 「父」 | múpì | 「あなたの父」 |
| ḡótê | 「母」 | ḡútí | 「あなたの母」 |
| b. mànápè | 「おじ」 | mànáp-ù | 「あなたのおじ」 |
| mèrèpè | 「祖父」 | mèrèp-ù | 「あなたの祖父」 |

もちろん、バリ語の事例は散発的な例であり、かつアラビア語型形態論とは異なり韻律構造を変化させないが、貫通接辞が発生する過程に関する示唆でもあるようにみえる (少なくとも語幹基盤モデルによる (6) の説明とは並行的である)。言語学的なアラビア語 (型) 形態論の分析にとって、今後まず必要とされるのは貫通接辞という現象をアプリアリにその他の連続的 (linear) な接辞と並行的なものとする想像ではなく、それ自体を「稀有」なものとして発掘することなのかもしれない。

[謝辞]

本研究の初稿を子細に検討しコメントを下さった査読者に謝意を表します。本研究は日本学術振興会科研費 (課題番号: 19K13160) の助成を受けています。

[参考文献]

- 川原繁人 (2022) 『音声学者、娘とことばの不思議に飛び込むーブリチュワからカピチュウ、おっけーぐるぐるまで』東京: 朝日出版社。
- 児馬修 (2015) 「派生接辞の生産性ーable の歴史」『立正大学文学部研究紀要』29: 1–12.
- 佐々木嗣也 (1994) 「現代ヘブライ語の二次語根の分類」『オリエント』37(2): 75–87.
- 高橋洋成 (2005) 「中世におけるアラビア・ヘブライ言語学ー語根理論の発展を中心に」『一般言語学論叢』8: 47–58.
- (2006) 「セム諸語の語構造に対する一般言語学的アプローチ」『オリエント』48(2): 28–46.
- 仲尾周一郎 (2019) 「アラビア語教育における「音韻規則」の扱いについて」『外国語教育のフロンティア』2: 335–353.
- 宮岡伯人 (2002) 『「語」とはなにかーエスキモー語から日本語をみる』東京: 三省堂.

Ali, A. S. M. (2006). Compounds. In: K. Versteegh et al. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Lan-*

- guage and Linguistics*, Vol. 1and. Leiden: Brill. 451–455.
- Anderson, S. (1992). *A-morphous Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Aronoff, M. (1976). *Word formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- (2013). The roots of language. In: Silvio Cruschina, Martin Maiden and John Charles Smith (eds.) *The Boundaries of Pure Morphology: Diachronic and Synchronic Perspectives*. pp. 161–180. Oxford: Oxford University Press.
- Badawi, E-S., and M. Hinds (1986). *A Dictionary of Egyptian Arabic: Arabic-English*. Beirut: Librairie du Liban.
- Bat-El, O. (1994). Stem Modification and Cluster Transfer in Modern Hebrew. *Natural Language & Linguistic Theory* 12(4): 571–596.
- (2003). Semitic verb structure within a universal perspective. In: J. Shimron (ed.) *Language Processing and Acquisition in Languages of Semitic, Root-based, Morphology*. Amsterdam: John Benjamins. 29–59.
- (2017). Word-based Items-and-processes (WoBIP) Evidence from Hebrew morphology. In: C. Bower, L. Horn and R. Zanuttini (eds.). *On looking into words (and beyond): Structures, Relations, Analyses*. Berlin: Language Science Press.
(DOI: 10.5281/zenodo.495467)
- Bauer, L. (2001). Compounding. In: A. Burkhardt, H. Steger and H. Ernst Wiegand (eds.) *Language typology and language universals*. Vol. 1. Berlin: Walter de Gruyter. 695–707.
- Broselow, E. (2000). Transfixation. In: G. Booij, C. Lehmann, J. Mugdan (eds.) *Morphology: An international handbook on inflection and word-formation*. Berlin: Walter de Gruyter. 552–557.
- Chomsky, A. N. (1951=1979). *Morphophonemics of Modern Hebrew*. New York: Garland Publishing.
- Davis, S. (2019). Are there transfer effects in the Arabic comparative? In: A. Khalfaoui and M. A. Tucker (eds.) *Perspectives on Arabic Linguistics XXX*. Amsterdam: John Benjamins. 33–51.
- Dixon, R. M. W. (2010). *Basic Linguistic Theory*, Vol. 1. Oxford: Oxford University Press.
- Dressler, W. U. (2000). Subtraction. In: G. Booij, C. Lehmann, J. Mugdan (eds.) *Morphology: An international handbook on inflection and word-formation*. Berlin: Walter de Gruyter. 581–587.
- Haspelmath, M., and A. D. Sims (2010) *Understanding Morphology* (2nd Edition). London: Routledge.
- Haywood, J. A. (1965). *Arabic lexicography: Its history, and its place in the general history of lexicography*. Leiden: Brill.
- Heath, J. (1987). *Ablaut and ambiguity: Phonology of a Moroccan Arabic dialect*. Albany, NY: SUNY Press.
- (2003). Arabic derivational ablaut, processing strategies, and consonantal “roots”. In: J. Shimron (ed.) *Language processing and acquisition in languages of Semitic, root-based, Morphology*. Amsterdam: John Benjamins. 115–129.
- Jeffery, A. (1938=2007) *The foreign vocabulary of Qur’ān*. Leiden: Brill.
- Kilani-Schoch, M., and W. U. Dressler (1985). Natural Morphology and Classical vs. Tunisian Arabic. *Studia gramatyczne* 7: 27–47.
- Koerner, K. (1989). *Practicing linguistic historiography*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kogan, L. (2005). Observations on Proto-Semitic vocalism. *Aula orientalis: Revista de estudios del Próximo Oriente Antiguo* 23(1-2): 131–167.

- Kuryłowicz, Jerzy (1973). *Studies in Semitic grammar and metrics*. London: Curzon Press.
- Larcher, P. (2006). Derivation. In: K. Versteegh et al. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, Vol. 1. Leiden: Brill. 573–579.
- Lipiński, E. (1997). *Semitic languages: Outline of a comparative grammar*. Leuven: Peeters.
- McCarthy, J. J. (1979). Formal Problems in Semitic Phonology and Morphology. Unpublished Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
(URL: <http://www.ai.mit.edu/projects/dm/theses/mccarthy79.pdf>, March 31, 2023)
- (1981). A prosodic theory of non-concatenative morphology. *Linguistic Inquiry* 12(3): 373–418.
- (1982). Prosodic templates, morphemic templates, and morphemic tiers. In: H. van der Hulst and N. Smith (eds.) *The structure of phonological representations* (Part I). Dordrecht: Foris Publications. 191–223.
- McCarthy, J. J. and Prince (1986). Prosodic Morphology. manuscript.
(URL: https://scholarworks.umass.edu/linguist_faculty_pubs/13, March 31, 2023)
- (1990). Foot and Word in Prosodic Morphology: The Arabic Broken Plural. *Natural Language & Linguistic Theory* 8(2): 209–283.
- McWhorter, J. H. (2001). The world's simplest grammars are creole grammars. *Linguistic Typology* 5: 125–166.
- Nakao, S. (2017) A grammar of Juba Arabic. Kyoto University, doctoral dissertation.
- Prunet, J. P. (2006). External evidence and the Semitic root. *Morphology* 16: 41–67.
- Ratcliffe, R. R. (1997). Prosodic templates in a word-based morphological analysis of Arabic. In: M. Eid and R. R. Ratcliffe (eds.) *Perspectives on Arabic Linguistics X*. Amsterdam: John Benjamins. 147–171.
- (1998). The “broken” plural problem in Arabic and comparative Semitic: Allomorphy and analogy in non-concatenative morphology. Amsterdam: John Benjamins.
- (2013). Morphology. In: J. Owens (ed.) *The Oxford Handbook of Arabic Linguistics*. New York: Oxford University Press. 71–91.
- Rubba, J. (2001). Introflexion. In: A. Burkhardt, H. Steger and H. Ernst Wiegand (eds.) *Language typology and language universals*. Vol. 1. Berlin: Walter de Gruyter. 678–694.
- Schramm, G. M. (1991). Semitic morpheme structure typology. In: A. S. Kaye (ed.) *Semitic studies in honor of Wolf Leslau*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz. 1402–1408.
- Souag, Lameen (2020) When is templatic morphology borrowed? On the spread of the Arabic relative. *Morphology* 30: 469–500.
- Takashina Y. (2020–2021). A study on *tā' marbūṭa* (I–II). *Kansai Journal of Arabic and Islamic Studies* 18: 59–108, 19: 93–146.
- Tafazzoli, A. (1986=2011). Arabic language, ii. Iranian loanwords in Arabic. *Encyclopaedia Iranica*. Online version. URL: <https://iranicaonline.org/articles/arabic-ii>, March 5, 2023)
- Watson, J. C. E. (2021). Arabic morphology: Inflectional and derivational. In: K. C. Ryding and D. Wilmsen (eds.) *The Cambridge Handbook of Arabic Linguistics*. Cambridge University Press. 405–423.
- Wehr, H. (1994). *A dictionary of Modern Written Arabic* (4th Edition). (ed.) Cowan, J. M. Ithaca, NY: Spoken Language Services, Inc.
- Wright, W. (1859=1967). *A grammar of the Arabic language* (1st Paperback Edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Zaborski, A. (2006). Biradicalism. In: K. Versteegh et al. (eds.) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, Vol. 1. Leiden: Brill. 313–316.